

# 『人類学雑誌』考 —民俗学の揺籃期—

曾我部 一行  
及川 祥平  
今野 大輔

## はじめに

従来、民俗学の前史としては本居宣長らの国学の地方の慣習への関心が注目されてきたが、明治時代の、民俗学が学問として形成される直前の研究はあまりなされてこなかった。そこで、小稿では、民俗学形成以前に生活慣習を研究対象としておりながらも、民俗学の世界では積極的には評価されてこなかった東京人類学会の活動を、その機関誌『人類学雑誌』の分析を通して考え、そして民俗学がどのような学問であろうとしたのかを検討し、さらには今後のあるべき姿をも探していきたい。

『人類学雑誌』は明治19（1886）年の創刊であり、坪井正五郎を中心に運営されていた東京人類学会の機関誌である<sup>1)</sup>。「幼少の頃から雑書を読むのが好でしたが博物書や随筆の類を見るに及んで事物を比較して異同変遷を考えるのが面白」かったという坪井は、明治10（1877）年に大学予備門へ入って以降、モースの大森貝塚発掘や佐々木忠次郎の講演、コロボックルについて渡瀬荘三郎の話を書くなど、古物への関心をますます高めていく<sup>2)</sup>。明治17（1884）年、白井光太郎らと能登で遺跡や古物を調査した事がきっかけとなり、坪井は東京人類学会の母体となる「じんるいがくのとも」を結成、第5回会合から「人類学会」という名称を用い始めた。明治19（1886）年には機関紙『人類学会報告』を刊行し、会員数も徐々に増えていく。この年、特別に坪井がただ一人の人類学専攻として大学院へ進学している。人類学への関心が坪井の周囲のみならず、広く浸透しはじめていた時期といえよう。

こうして形成された人類学会に参加していた階層についても言及しておこう。第一に多いのは教師や学生で、医師も意外に多い。これは人類学のなかでも形質人類学に関心を寄せていたものであろう。また、元老院議員や軍人なども幾らか見える。さらに、山中笑のようなキリスト教伝道師をはじめとする宗教者、商人、農民など、割合に幅広い分野・階層の人々が参加していたことがうかがえる。事実、中央の学徒のみならず、地方在住の者からの寄稿も目立つ。

『人類学雑誌』に寄せられた論考としては、現在では分化独立している諸学問が未分化のままに混在しており、人類とは何かという大きな問いでは共通するものの、具体的な研究対象は様々である。そのなかで注意すべきは、「土俗」「風俗」と称して生活慣習が対象とされていた点であろう。『人類学雑誌』は生活慣習をも研究の俎上にのせている点において、以後に成立する民俗学と連続性を有している。民俗学が「民俗」と称して対象化する事象を、民俗学以前にどのように取り扱っていたのかという問題がここに想定できる。

先述したように、従来、民俗学の前史としては国学が重要視されていた。さらに屋代弘賢の関心や菅江真澄らの成果など、江戸時代にはすでに民俗研究の萌芽が見られたことは知られている。しかしながら、一般的にその国学はいわゆる洋学の流入した明治時代には衰え、民俗的なものへの関心も同様に停滞したとされている。ところが、そのような関心は、国学ではなく新たに興った人類学の中に確かに継承されていたのである。それにも関わらず、民俗学では『人類学雑誌』への評価は高いとは言えない。

小稿の目的は『人類学雑誌』を民俗学の前史として位置づけ、民俗学がどのような背景のもとに成立したのか、その一端を押し量りつつ、『人類学雑誌』の関心と民俗学との連続性ないしは異質性を問うことにある。

さらに注意すべき事実として、民俗学の創始者柳田國男はその活動の初期において、『人類学雑誌』に論考を投稿している。その一方で、後の柳田の発言の中には人類学の取り組みを批判する言説もみることができ、研究対象の上で明らかに民俗学との連続性を有しているにも関わらず、柳田は「人類学」のどのような側面を批判していたのか。それは柳田が民俗学をどのようなものとして構想し、また構築していったのかという問題と関わる。また、民俗学は、通史的にみてその目的や理念に

において変遷を経てきた学問であることも忘れてはならない。そこで、柳田の学問と『人類学雑誌』の関係、民俗学史全般の中における『人類学雑誌』という、二様の視線からアプローチしていく必要があるといえる。

## 第1章 研究史の整理と問題の所在

民俗学が柳田國男が中心となって構築した学問であるという性質上、民俗学前史は柳田が学問を整備していく際に影響を受けたであろう知的営みと言い換えることもできる。鳥越皓之は、心意を重視する柳田民俗学の姿勢を「国学の先行学問としても位置付けられる」歌論に通ずるものと指摘しているが<sup>3)</sup>、その意味においては国文学をも民俗学の前史の一つとして把握することもできよう。そうした中で、人間を対象とする科学的研究たる人類学もまた、民俗学の前史だといえる。後述するように柳田自身、人類学会の創始者であり初期の中心であった坪井正五郎の学問を、民俗学の立場から高く評価している。また、その後の研究者が民俗学の学史を編む際にも、明治期の人類学及び『人類学雑誌』をその前史として位置づける視点は採られてきた。

民俗学の立場からの先行諸研究を整理する前に、人類学会の立場から初期『人類学雑誌』の傾向を整理した渡辺直経の論考を紹介したい。渡辺は創刊から大正2（1913）年までの『人類学雑誌』を振り返っているが、「民族関係」という章において、この時期の『人類学雑誌』における民俗学的研究の動向を回顧している<sup>4)</sup>。渡辺によると「民族土俗」の研究について坪井正五郎は「その地域的異同を明らかにし起源変遷をたどることによって、人類学の目的を達する」ことを目指し、その結果、創刊当初には各地の風俗・年中行事・年始風習・妄信・方言などの報告が集まったとしている。さらに、寄稿者と報告内容の傾向を大まかに列挙してこの時期の特徴を総括した。しかし渡辺論考はやはり「回顧」であるためか、同誌の民俗学的報告の推移を紹介するにとどまり、それがその後の民俗学に与えた影響についてまでは分析が及んでいない。

では、民俗学者は民俗学史の中に『人類学雑誌』をどのように位置づけてきたのか。

関敬吾は「日本民俗学の歴史」において、民俗学の端緒を人類学に求め<sup>5)</sup>、坪井正五郎ら東京人類学会の発足と『人類学雑誌』の創刊に対し

て「ここに民俗学の研究がはじまった」と明確に述べている。しかしながら関は、『人類学雑誌』における研究方法にはきわめて批判的であった。東京人類学会の人々の研究が当時の進化主義的発想に基づいた統計的・比較方法によるものであり、また、その比較方法が「それほど検討も加えられず、しかも唯一の方法として採用されている」と批判の目をむけている。

和歌森太郎もまた、『人類学雑誌』を民俗学史の一部として位置づけながらも、その方法には批判的であった。和歌森は『日本民俗学講座』において、いわゆる民俗が旧来の陋習として批判的眼差しをもって見られていた明治時代、民俗学的関心が現れたのは人類学界であったとし、関と同じく学史的な位置づけを行なっている<sup>6)</sup>。しかし和歌森もそれらが「民俗の科学、常民の伝承的生活の研究ということからは遠いところに立っていた」ものであったと批判する。和歌森によると、『人類学雑誌』で日本人が日本人の伝承を調査する際、まるで外国人のことを調査するような態度をとり、「民間伝承に宿る歴史性の吟味などとうてい行い得なかった」、「日本民俗をみること未開人の文化をみるのと同然であった」という。また、有形のものを熱心に取り上げながら社会生活意識との関係は考えず、また日本人に関する研究という意識が稀薄なため被差別部落民を非日本人とみるなどの謬見を生んだとも指摘している。

植松明石も前二者と同様に、『人類学雑誌』における研究を批判している<sup>7)</sup>。植松は、この時代の生活慣習に対する眼が、19世紀後半に欧米で盛行した古典的進化学説によって、「人類社会の進化の過程に位置づけるため」のものであったという。つまり、日本文化を認識する上での民俗ではなく、進化論的発想に基づいて、人類社会一般に通ずる古代文化、原始文化への眼差しであったというのである。

このように、生活慣習に向けた視点は評価するものの、その研究方法は批判するという姿勢が、これまでの民俗学における『人類学雑誌』評であった。和歌森太郎の「その研究態度には資料を類聚する点までは、一段進歩を認めることはできるが、真の民俗研究にとって肝腎なのは、同様の類型間での比較研究であるのに、それがとげられない。(中略)ことに歴史に対する方法に至っては無力といってよい」という言葉など、その最たるものと言える。民俗学にとって『人類学雑誌』における生活慣習の研究は、好事家の域を出ないものという評価が支配的だったと

いってよい。そうした批判には、前史を批判的に検証し、現在の民俗学の正当性・独自性を主張しようとする意図が看取できる。もちろん、学史とは学問の発展の歴史であり、関や和歌森らのそうした意図が問題になるわけではない。だが、2007年現在、『人類学雑誌』の創刊から120年が経過した。関や和歌森の論考からも30年の歳月が経っている。彼らが展開した民俗学も、今日では検討すべき時期にきている<sup>8)</sup>。彼らの『人類学雑誌』に対する評価が今日でも妥当であるか否かも、問題化しておくべきであろう。

坂本要の「変態と風俗研究」はこれまで民俗学が好事家的なものにすぎないとして批判してきた明治期の風俗研究を学史に位置づける試みであり、当然のことながら『人類学雑誌』もまた、後の民俗学に連なる風俗研究として言及されている。坂本は、当時の風俗研究を単純に批判するのではなく、柳田がいわゆる一国民俗学を樹立する際の反対概念としてそれを捉えていたと主張した<sup>9)</sup>。そして、いずれも生活慣習へそそがれる眼差しであったが、風俗学は生活慣習に珍変奇異を見出して成立したもので、民俗学はそのような珍事・奇談を珍変奇異で済まさず、日常的なものや一般的なものの中に位置づけて解釈しようとした学問だと主張した。

一方、大藤時彦は民俗学史を振り返る中で、「明治時代の研究としては、まずこれを挙げねばなるまい」と『人類学雑誌』を取り上げる。大藤は「土俗調査には比較研究が必要であり、各地方毎の土俗を比較せねばならぬということを、坪井正五郎ははっきりと述べて居る。これは、日本民俗学の前史を考える場合、無視出来ない重要な発言だと思う」とし、関や和歌森とは異なり、坪井たちの比較研究を積極的に評価している<sup>10)</sup>。

坪井の「其の観察をバラバラにして置かないで順序よく並べて比較し研究する」<sup>11)</sup>という言葉からもわかるとおり、人類学研究において彼は常に比較研究を重視していた。和歌森は『人類学雑誌』では比較研究が遂げられなかったと述べていたが、坪井らは比較研究を念頭に置いていなかったわけではなかった。加えて大藤は、後述する土俗談話会などの土俗調査を、今日の民俗学のごく初期の研究として考えているほか、鈴木券太郎や伊能嘉矩、出口米吉らを民俗学の立場から注意すべき人物を指摘している。

以上、『人類学雑誌』をめぐる先行研究を整理してきた。学史の一部として簡単に触れるのみで、分析的視点からこれにあたったものがなかったことが第一の問題点といえる。また、そこには、しばしば批判の形で、『人類学雑誌』を紹介する研究者の依拠する学問観が顕在化していた。

繰り返すが、小稿の目的は、『人類学雑誌』における生活慣習への取り組みを分析し、民俗学との連続性をも十分に認めたいうえで、民俗学と『人類学雑誌』との断絶の質を問うていくことにある。具体的にいえば、研究方法やそこに寄稿していた人々の興味関心の持ち方などを分析する。学史上、民俗学の立場からの民俗観すらも変遷発展を遂げてきたことを振り返れば、『人類学雑誌』がその後の民俗学にどのような影響を与えたのかを再考し、これを民俗学の前史として改めて位置づける作業は、現在の民俗学を考える上でも必要と思われる。

以下では『人類学雑誌』各巻の内容の全体的傾向を整理しつつ、当時の研究者の問題意識や生活慣習にそそぐ眼差しが比較的明確に表れている論考を選択し、分析を行なう。創刊第1巻から坪井正五郎の死去する第28巻までを、便宜上ほぼ10巻ごとに3期に分けて記述していく。また、柳田國男と『人類学雑誌』との関係や、大藤が民間伝承の会に相通ずる情報交換の場として評価した土俗談話会についてなど、大きな問題については1章を設けて言及する。

## 第2章 『人類学雑誌』における生活慣習研究の動向

### 第1節 第1期：『人類学雑誌』創刊

ここでは便宜上、『人類学雑誌』1巻から10巻（第1号～第114号）を仮に第1期として括り、この期の大まかな傾向を整理していく。まず、坪井が人類学の立場から生活慣習研究の意義を謳った論説に注目する。坪井は第4号「人類学の効用」において、人類学は「人類に関する万般の真理を攻究する学問」とし、その目的のためには形質的な領域の探求と風俗習慣の調査の両方を兼ね備えた学問である点において効益が大きいと主張する。第18号と第21号に掲載された「人類学当今の有様」において、具体的な研究内容を海外の人類学史を参考にしつつ、「形

躰門]、「心理門」、「工芸門」、「器物門」、「風俗門」、「習慣門」、「言語門」、「原人門」の八部門に整理し、一般読者もこれにしたがって材料收拾をして欲しいと呼びかけている。この中で注目すべきは「風俗門」と「習慣門」である。「風俗門」は衣食住に関するもので、分布の比較や時代的変遷をうかがう素材になるとしている。また、「習慣門」には社会関係や年中行事、言伝えやしきたりが含まれ、これらは集めても一見意味が無さそうだが、由来や分布を考えていくと有益な結果が得られるとし、その収集方法について助言が添えられている。

なお、明治22年(1889)から25年(1892)年までのイギリス留学の後、坪井は第82号から数回にわたって「人類学大意」を発表し、改めて人類学の定義を示している。そこでは、人類学は「人類の理学」、「人の事を調べる学問」とされ、その目的は「人類の現状」、「人類の異同」、「人類の自然に於ける品位」、「人類と周囲の事物との関係」、「人類古今の別」、「体格上」、「精神上」、「人類古来の発達」、「現時の変動」、「人類の起源」、「人類現出の時代」、「人類現出の場所」、「人類数量の増減」、「人類の分布」、「諸人類相互の関係」、「人類学の範囲」を説明することだという。

坂野徹は『帝国日本と人類学者』(勁草書房 2005年)の中で、坪井の提唱した人類学が、人類に関するすべての研究をし、材料収集を重視する一方で、あえて方法論を限定していなかったことが特徴であったと述べている。人類学創設当初から、坪井は生活習慣の研究に積極的意義を見出していたことに小稿は注目する。それは、先述した留学中に、雑誌「The folk-lore journal」を帝国大学の図書館へ送ったり、当地の土俗(エスノグラフィ)学会に入会していることから明らかである<sup>12)</sup>。加えて、坪井はただ収集するだけでなく、地域的・時代的比較、変遷への着眼の必要性を認め、これを明言している。第86号「人類学研究の趣意」でも、「諸人種の風俗習慣の調べ」である土俗学や、過去を知るための「史伝口碑」もやはり人類学の材料の一つとされ、これらは考古学的成果などと併せて、人類の歴史を解明するのに重要なものとし、やはり事象の変遷の研究を重視している。

ちなみに、第50号「ロンドン通信」には「民俗学」の語が現れ、第54号「ロンドン通信」では、民俗学と土俗学は同じであり、共にエスノグラフィのことだとしている。土俗学とは「広い狭いに関せず一地方一地方の風俗習慣を調べ」る学問であるといい、これには①「諸地域の異

同が知れる」、②「如何なる有様が存在し得べきものであるかと云ふ事が悟れる」、③「風俗習慣の起源変遷が推測される」という三つの利益があると主張する。①は、ある土地の人を語る時には、その土地の風俗習慣を知ることが重要で、一つの出来事に対しても、土地によって考えが異なるのが普通であり、常態と比較することで真相が分かるという意味である。②は、自分の社会や地方にはない風俗や習慣を聞いても、色々な諸地方のものを知っていれば疑うこともなくなるということで、③はある地方で行われていることの意味がわからない時に、他地方の類似した事例を集め比較することにより由来や真理が分かるということである。坪井は③の利益が最も価値があるとし、この三利益は万国共通のものであるという。また、風俗習慣は時と共に変化・消滅してしまうものであり、収集を急がなければならない旨をも主張している。

坪井が生活慣習の研究に力を入れていた証拠の一つとして、土俗談話会への関与もあげられるが、これについては後に一節を設けて言及する。

以上、坪井の発言を手掛かりに、人類学はどのように構想され、その素材としての生活慣習への関心のあり方を推し量ってきた。以下では『人類学雑誌』に寄せられた坪井以外の論考の傾向を整理していく。

雑誌全体の傾向としては、考古学関係の論考が圧倒的に目立つが、生活慣習に関する論考も比較的多く、形質人類学的な論考よりもむしろ多い。中でも、雑誌創刊当初より多かったのは婚姻習俗と方言に関するものである。婚姻習俗に関しては、第2号で渡瀬荘三郎が「我国婚姻に関する諸風習の研究」を発表し、欧米の先行研究に基づき、人間社会は文明の進歩度合いによって法律に差が現れ、婚姻法を研究することで土地ごとの「開化の進度」、「知徳状態」が分かるといっている。続けて、地方には交通が未発達なために、「古代風習の一斑を窺」えるというように、本居宣長などに近い考えを述べ、消滅する前に早く収集するべきだとし、詳細な調査項目を作成している。それに応える形で、第3号から第29号に渡って計16回もの報告が掲載された。だが、ほとんど事例報告にとどまり、これらの資料を用いて比較や変遷を論じるものはなかった。

方言については、三宅米吉、辻敬之、岡村増太郎らが連名で発表した第8号の「方言取調の主意」が目立つ。三宅らは、方言を収集し国語の現況を詳らかにすることにより、国語の変遷、方言が起こった理由が明らかになり、国語の将来を予測できると指摘している。また、交通の発

達による方言の融合・消滅が危惧されており、その収集は「一大急務」であると主張している。これを受け、羽柴雄輔も第33号「方言取調を賛成する事及庄内方言表」において、方言収集、方言辞書の編纂を呼びかけている。なお、これらの論考が発せられる前から方言収集は開始されていて、その活動は15年ほど続いた。

また、特定の地域に焦点を当てた報告も行われている。第23号「伊豆諸島に於ける人類学上の取調、大島の部」や第34号「志摩国英虞郡和具村の風俗」、第110号「武蔵秩父地方に於ける人類学的旅行 土俗」、第113号「伊豆新島の土俗」等は特に優れ、衣服、食性、住居、生業、習俗、信仰など多くの項目について調べられ、民俗誌の様相を呈している。

1巻から10巻の範囲で特に注目したいのは鈴木券太郎の業績である。鈴木は内閣文官試験局に所属し、その著作は犯罪心理、人種、経済、婚姻法と多岐に渡っており、『人類学雑誌』上で精力的に生活慣習の研究に取り組んでいる。第37号「患部を画きて神社に納むるの風習に関して」は、名和靖の「患部を画きて神社に納むるの風習」に対して自分の解釈を述べたものだが、丑の刻参りや噂をされるとくしゃみをする、神体の自分の悪いところとの同じ部分を摩り平癒を祈ることを例として引き、こうした発想は幼稚な世界に存在するもので、「画きたるものは其事物と毫も異ならざるの働きあるものと信じ居る」ためだと述べている。これはフレイザーの類感呪術に通じる指摘ともとれよう。鈴木は35号の「本邦古代法取調項目」の中で115項に及ぶ詳細な調査項目を設定し、今こそ過去の制度・風俗を調べる時として、質問表を作成し、会員に協力を促している。

鈴木論考の中で特に注目したいのは第42号「旧化生存の話」である。「旧化生存」とは即ち、近代化する生活の中にも古い文化が残存していることを指す概念であり、「殆ど古の儘に或信仰思想風習を傳承して形態精神を并せ有している」場合と、「新衣裳を装つて一見しては其の生体を顕さざれども内部若くは或縁側に判然影を残し跡を留めて居る」場合との二様があると指摘している。つまり、直接的な文化の残存、及び、一見変形をして今日風になってはいるがその内部或いは一部に前代から残存する要素があるということである。

「旧化生存」という概念は以後の『人類学雑誌』上では注目された形跡がみられないが、今日の民俗学の立場からみて非常に興味深いもので

ある。少なくとも、この時期から文化の時間的移動を概念化する試みがなされたことは評価すべきであるし、また、ここから当時の研究者の事象にそそぐ眼差しの質を読み取ることができる。

先述した関や和歌森も鈴木の「旧化生存」に注目し、民俗学の発想に相通じる側面を見出しているが<sup>13)</sup>、「旧化生存」という、事象の時間的移動を表現する概念と、民俗学の用いる事象の時間的移動を把握する概念は、近似こそすれ等号では結び得ないものであることには注意しなければならない。少なくとも、「旧化生存」という概念が生み出された背景にある進化論的ニュアンスを切り離す作業は必要であろう。「旧化生存」を今日の民俗学では、通常、「伝承」の語で把握している。「旧化生存」と「伝承」の間にはどのような差異があるのか。「旧化生存」は、主語となるものが文化であり、刷新していく文化の流れの中にうかがえる前代のものを、残存とみなしている。即ち、文化の主体者たる人間への着目の欠如と進化論的な発想とが「旧化生存」なる概念の中には包摂されている。一方、「伝承」は、主語を文化ではなくその保持者に定めている。つまり、意識的・無意識を問わず、伝達者と継承者の存在を前提とした概念である。文化が伝承される際の動機や原因を直接的に問題化できる概念が「伝承」であると我々は考える。そして、「伝承」とは個別の事象のみならず、変遷の過程において様々な事象として顕現する心性にも適応する概念である<sup>14)</sup>。

文化の時間的移動を表現する概念を介して、当時の人類学と民俗学とが研究対象に注ぐ眼差しの相違をみることができるといえよう。

## 第2節 第2期：土俗研究の展開

11巻から19巻（第115号～第222号）の範囲においても、前10年と同様、全体として生活慣習に関する論考の量は、考古学その他への関心に比して決して多いとはいえない。また、生活慣習の研究の中でも、台湾やその他日本以外の地域におけるそれへの関心が比較的多い。先行諸研究が指摘するように、日本文化への関心ではなく、人類文化全体を視野に置いた前近代的生活慣習への関心を中心である判断できる。11巻から19巻の傾向を整理すると、前10年において活発であった民俗誌的報告が第15巻くらいまでみえるが、16巻以降は減少傾向を示す。

第2期において特筆すべきは高山青嶂の涅槃風俗の研究であろう。涅槃

歯即ち鉄槌の風習についてはすでに1巻から言及されており、高山以前にも関心を寄せた者もみえる。高山は調査項目を整備するなど精力的に研究を行い、17巻以降19巻まで夥しい論考を寄せている。これに触発され、他にも涅槃風俗についての報告がみえる。次いで、俗信の報告が多くなる。第六回土俗談話会で「盲信俗伝」なる主題が採られて後、これに触発されたものであろう、「○○地方の盲信俗伝」と銘打たれて何度か論考報告が寄せられている。

また、この時期で注意したいのは、山中笑（共古）の活動である。山中は日本で最初のキリスト教メソジスト派の牧師であり、柳田とも交流のあった人物である。既に第15号「粥杖の起り」、第21号「御幣及び削掛の起り」、第40号「門戸に掲出す御守りの話」等を発表し、初期から『人類学雑誌』に関与していたが、この時期においては、第115号「甲斐の石棒」や第116号「甲斐の子供遊び」、第135号「甲斐の贈答風習」など、当時伝道活動のため甲府に居を構えていた地の利を活かし、当地で見聞採集した生活事象を中心に報告を寄せている。また、柳田國男主導の後の「炬辺叢書」に収録されることになる「甲斐の落葉」が199号から六回に分けて掲載されていることにも注意したい。

昭和50（1975）年に復刻された『甲斐の落葉』所収の著作目録を参照するに、山中の研究活動は幅広く、『人類学雑誌』のみならず様々な方面の雑誌に寄稿していたことがうかがえ、考古学的方面の活動も多かったことが知れる<sup>15)</sup>。第115号「甲斐の石棒」も「真の石器時代のものを何処かに見出すであらう」とする一文に端的に現れているように、考古学的関心に基づいた報告であった。そこでの事例の大半は道祖神や神体、地蔵の胎内仏といったものであったが、その石造物がなぜ信仰の対象となり得たのか、その理由や論理へ関心をよせるものではなく、石棒という物体とそれが石器時代の遺物か否かという即物的関心に偏したものと見える。また、「甲斐の落葉」は見聞したことの箇条書き的報告で、内容は断片的ではあるが、産育や食生活、信仰、祭礼、口承文芸（伝説）にまで及び、考古学的内容も多い。併せて、のちに柳田の『石神問答』の問答相手になったように、道祖神や地蔵への言及も多い。坪井正五郎の風俗測定の影響を受けたものか、明治21（1888）年の甲府市中の風俗測定の結果も記されている。目には見えにくいものへの言及もあるが、傾向としては物体として実見できる事物への関心であったかと思われる。

中沢厚は上述の『甲斐の落葉』の解説において、その学風を「民俗そのものに個人の思想をおしつけ」ない科学性を有し、ある種遊びにも似た探究心があると評価している。また、中沢は「共古先生略伝」においては、「趣味的ではあるが趣味にとどまらず、むろん心情におほれるような所がない」とし、また、「いわゆる考証学からも数歩前進し、常に実証から出発する」とも評している<sup>16)</sup>。「甲斐の落葉」に代表される山中の報告の資料的意義はもちろん、その学風や認識のあり方についても、柳田と接点のあった人物として、民俗学史上、再評価すべき人物といえようか。

次に、第126号宮島幹之助「越後三面村の土俗」、第186号水越正義「土俗比較談」を取り上げ、詳しく内容を検討していく。宮島幹之助は米沢在住の人物である。「越後三面村の土俗」のほか、第203号に「癡の方言並びに迷信に関する材料を求む」なる文章を記し、山城国久世郡淀町及び近郊における自身の調査結果を報告しつつ、情報提供をよびかけている。以後、宮島の呼びかけに応じて、第206号、第209号に報告が寄せられている。

「越後三面村の土俗」は三面村の生活慣習をある程度総体的に報告するものである。宮島はまず交通機関の普及・発達、普通教育の浸透による「土俗」の急激な消滅を指摘して、土俗調査は急務であると主張する。宮島は「勿論従来の風俗習慣中には悪む可く厭ふ可き者多く陋風醜俗の消滅するは喜ふ可きこと」としながら、人類学上かかる風俗習慣こそ研究を要する好材料であるとし、前近代的習慣の全てを否定的に捉えてはいない。次いで、宮島は土俗調査の心得を示している。まず、「自家身辺の近くより遠きに及ぼすを得策とす」といい、それは郷里の風習は「幼時より慣れて如何なる奇風異俗も以て平常の事とし怪しまず疑」わなから、自らにとって日常普通の生活事象を研究対象として意識するためには、自分とは違う生活をおくる人々の文化に接する必要があるというのである。そう前置きした上で、宮島は郷里米沢ではなく、越後三面村の調査結果を報告していく。宮島は地理的概況から説き及ぶが、交通の便の悪いことにはじまり、「武陵桃源」なる語で当地を比喻するなど、僻陋を通り越して人外境を描くかの筆致で書き進める。紀行文風に記されたくだりは秘境探検記の類と大差ない。三面人なる語で三面村の人々を呼ぶが、宮島の報告に「冬日獣皮等を携へ来りて市に売り夏時には米

穀を買はんか為めに會々来るあるのみ」とあり、周辺地域で三面人が様々な憶測や奇聞を主題とする噂話の題材とされている点などから推し量って、三面村とは柳田の言う「山人」にも比定し得るような山間集落としてとらえていたことが知れる。

古風遺俗が文明開化によって湮滅されようとするのを惜しんではいるが、宮島の三面村を見る眼差しからは、異文化と呼んでも差し支えないほどに自己の生活と隔たった生活への関心が看取される。調査地の選定からして、地域住民に奇異の感を抱かれていた山間の集落ゆえに対象としたらしい様子もうかがえる。一方で、進行する生活の均質化に焦燥を覚えている様子は後の民俗学とも共通する姿勢であろう。

水越正義は第98号に「伊豆新島婦人の現況」を発表して以降、第116号「伊豆七島の中、利島の土俗」、第164号「伊豆利島の住民」、第172号「伊豆国新島土俗を調査して本邦古代の遺風最多き所以を論ず」と、伊豆七島のことがらを中心に精力的に寄稿する。水島は、伊豆新島に「前後四年九ヶ月」滞在し、その後も頻繁に往来しており、そうした事情を利用して行われた研究であるらしい。

水越もまた交通の整備によって土俗が消滅していくことをたびたび危惧している。前述、第172号の論考において、当該地域の古風保存の主因と土俗変遷の動力を指摘し、古風保存の主因として、①黒潮の流域であり相模灘の嶮のため、内地からさほど遠くないのにも関わらず交通の機関を欠いている点、②祭政一致が行われている点、③他からの移住に不便なため、④戦争や天変地異の影響が少ないこと、⑤久しく婦人が内地へ出ることを禁じていた点を挙げている。また、土俗変遷の動力は①異邦への漂着、或いは異邦からの漂着、②応永年間僧日英による日蓮宗の布教、③寛文年代前後より流罪人をおいたこと、④明治30年汽船の航路が開けたことであるという。地域生活が古風を残す要因と、変遷を促す外部との接触に考察を沿わせた点は注目に値しよう。

第186号「土俗比較談」においては、水越はかつての居住地であった伊豆国新島、南多摩郡堺村相原、北豊島郡石神井村上石神井を事例に比較を行い、「如何に土俗が地理の変化に伴い遷り変れるか」を論じ、古物遺跡を根拠として三地域の往時の有様が同一であったことを主張している。調査地の選定や手法など比較作業に問題点は指摘し得るものの、交通機関を含めた地理的条件、制度や宗教といったものに、土俗の残存

状況の要因を求める視点は、地域生活それ自体への関心ともとれ、注目される。

以上、宮島・水越の論考から、当時の研究者の生活慣習への眼差しの質を推し量ってきた。まず、生活慣習への関心が珍変奇異なるものへの好奇心から出発している点には注意しておきたい。対象への好奇心というレベルでは、それ自体は批判の対象とはなり得ない。むしろ、『人類学雑誌』と民俗学の関係を推し量るに際して重要なのは、自分とは異質なものへの出会いをどのように認識するのか、という点である。進化論的発想は、異質な生活との出会いを、人類の発達過程の前後関係によって解説する。エキゾチズムにも似た好奇心と人類規模の問題へ肉迫すべく生活の原初的形態を求める姿勢とが、『人類学雑誌』において日本の前近代的生活慣習をみつめる眼差しの中にも読み取ることが出来る。宮島の論考には殊に異郷探検的ムードが濃厚であり、事象を担う人間への共感・理解は読み取れない。山中においては、そうした心情を排した点を、柳田とは別の民俗学のあり方として評価するむきのあることはすでに述べた。しかし、目につきやすい物象に関心が寄せられ、事象を見て人間を見ない研究傾向の主因は、対象が自文化の問題であるという認識が希薄であり、共感を要しなかったからではないかと推測する。

一方、水越の論考は、地域生活における土俗の保存された原因と変遷をうながした動力へ着眼したものであった。即ち、地域が置かれた当時の現状を視野にいれたものであり、珍事遺風と見做したものが珍事遺風ではなくなっていくプロセスを水越は見つめている。当時の論考の中でも出色のものであり、興味深いものといえる。

### 第3節 第3期：坪井の死と柳田の登場

本節では『人類学雑誌』20巻から、坪井正五郎が逝去する28巻（第223号～第320号）までについての内容を整理分析する。この時期の論考には、19世紀末から20世紀初頭の対外情勢の反映を読み取ることができる。例えば、台湾総督府の命で台湾の調査に従事した伊能嘉矩による、先住民の風習に関する論考が増加し、明治40（1907）年からは徐々に朝鮮半島での発掘調査報告も見られるようになる。

この時期の『人類学雑誌』誌上において、生活慣習についての報告を多く投稿したのは金沢出身の英語学者、出口米吉である。出口の関心は

いわゆる性崇拜から年中行事など様々な方面に渡り、その投稿件数は20篇以上にのぼる。出口は各地の風習が前代の旧慣陋習として批判的眼差しを浴びていた中であって、その採集にあたり、現地主義の精神を主張した。第225号「甲府より富山に至る途上の見聞」において、「余は其地方の同好が偏に精密なる調査を企てられんことを望む者なり」と、出身者などその地方の人々が主体的に調査することの有用性を説いたのである。

出口が関心を寄せた事象を整理するなら、まず、最初の論考である第182号「粥杖考」にはじまる性崇拜や道祖神の研究が挙げられる。出口は年中行事についても精力的に取り組んでおり、やはり前述「粥杖考」に始まり、その後も夏越の祓えについての第226号「輪祓につきて」や節分についての第228号「鬼の来る夜」、第277号「節分の夜門戸に挿す鯛頭につきて」、正月行事を扱った第234号「撒豆望粥及散米」、第235号「正月注連繩に炭を飾る習慣」、第238号「門松考」、第262号「元旦の福神」や、それに続く第263号「左儀長考」などがある。出口は俗信についても関心を持ち、第236号「忌詞につきて」や、強請祈願についての論考である第240号「強迫的禁厭」、第301号「魔除に赤色を用ゐる由来」、第303-304号「祓に関する一習慣について」、第305号「唾を祓除に用ゐる習慣につきて」など、祓いについても一連の論考を寄せている。また、第258号「烏崇拜の遺習」、第271号「我国に於ける石崇拜の痕跡」、第282号「我国に於ける植物崇拜の痕跡」などは、人々の動植物や無生物に対する信仰、ひいてはアニミズム的信仰について関心を示していることがわかる。他にも、明治45（1912）年以降は第313号「狗賓餅と黄泉戸喫」、第316号「大和国に行はるゝテンゴク（天御供）について」や第317号「指切りにつきて」では、人と人や人と神との契約の観念についての関心が示されている。また、これらの論考ではトーテム崇拜や共同飲食についての関心も表れている。

このように出口は、この時期に各地方の生活慣習についての研究を積極的に投稿しているが、傾向として出口は日本の生活慣習の起源のほとんどを中国に求めている。彼の研究方法は、まず国内の一事例を取り上げ、それと類似する事例を日本の古典、あるいは『人類学雑誌』や『風俗画報』から求める。その後、諸外国の類似した事例をも取り上げ、最終的な結論は示さないまでも、中国起源の風俗であると述べる。しかし、

それも国内の場合と同様、中国の古典に見られる風習が論拠であり、当時の状況と照らし合わせた結果のものであるとはいえない。事実、彼の論法は「全く支那の古俗を傳承せる者なりき」<sup>17)</sup>、「正月十五日家々にて製する望粥は支那より傳來せる風俗なることは、恰引證を要せざる程に明白なる事實なり」<sup>18)</sup>と、実に簡単に中国と関連付けてしまっている。

事例の起源を中国に求める学風は、近世期の隨筆における考証学の系譜をひくものと判断できる。しかし、その一方で、当時の『人類学雜誌』全体の傾向であった、ある傾向に影響されたものとも考えることもできる。

それは、第226号「輪襪につきて」に「我國の輪襪も以上挙げたる諸國の習慣と等しき幼稚なる原始的思想より出でたることは明なり」とあるように、一種の比較民俗学的な研究方法への志向である。出口の主眼は、ある生活慣習がどのような地域から日本へと伝播したのか、その道筋を辿ろうとする伝播論である。さらにいえば、外国（中国）から伝播して日本においてどのような変遷をとげたのかをも探ろうとした。そして彼は第238号「門松考」において樹木崇拜が「寧ろ同一信仰より出でたる類似の習慣が、日本にも支那にも歐洲にも印度にも等しく存在すと見るを以て穩當とすべきかも知るべからず」と、全世界的に普遍的に存在していた風習であり、それらが各地に伝播していったものと考えていた。そのような志向から、国内の事例の多様なあり方が捨棄されてしまったようである。

このような比較民俗学的な志向は、すべて述べたような『人類学雜誌』それ自体の性格でもあったといえる。

出口も『人類学雜誌』に底流する志向とは無縁ではなかった。また、出口の関心もまた、事象そのものへ注がれるのみで、動植物や無生物に対する信仰心などに注目しても、その理由を推し量る視点がやや欠けていたといえる。樹木崇拜などの「遺風」を保持する人々がこの日本にも存在するが、それはなぜそうなのか、という問題提起はなされていない。生活慣習の起源や伝播の経路に執着しているものの、その事例が残った原因理由、つまりそれを保持していた人々の心にまで踏み込むことはなかった。古今東西に及ぶ文献の渉獵による起源探究が一定の成果を挙げたことは疑いないが、それが「遺存」の理由という「現代」の問題を解明するには至らなかったのである。それらの研究が一体どのような問題

を抱え、また眼前のどのような問題解決に示唆を与える可能性を持つかは、依然として曖昧なものにとどまっていたと言わざるを得ない。様々な事象は見えてきても、それを持ち伝えている人々の姿はほとんど浮かび上がってこず、「事象の研究」とどまり、「事象による研究」の域までは至らなかったのである。

この時期には南方熊楠も生活慣習についての論文及び小報告を多数寄稿していたが、その博覧強記ぶりから、彼も出口以上に外国の事例との比較に重点を置いていた。また、南方は出口や山中らの論考に情報を追加するような形式の投稿が多く、南方自身の一貫したテーマは持っていなかったようである。南方の投稿は明治41（1908）年、第270号の「涅齒に就て」に始まり、それ以降精力的に投稿するようになる。そして翌42（1909）年は、柳田國男が『後狩詞記』を発表した年であり、その後南方と柳田が交流を開始したのは有名であるが、その柳田も明治43（1910）年7月に考古学者の柴田常恵の紹介で東京人類学会に入会している<sup>19)</sup>。ちょうど『石神問答』と『遠野物語』を相次いで発表した年である。

この時期は柳田國男が『人類学雑誌』に投稿し始めた時期でもある。柳田の『人類学雑誌』初投稿は第296号での「アイヌの家の形」であり、東北・北陸地方における民家の間取りとアイヌのそれとの共通点を報告している。また、第301号の「山神と『オコゼ』」は、南方が前号に投稿した「山神『オコゼ』魚を好むと云ふ事」に呼応したものである。その後柳田は2篇の論考を連載するが、そこから彼のどのような関心を知ることができるだろうか。柳田が連載した2篇の内のひとつは、第301～305号の「踊の今と昔」である。これは祭りなどにおける踊りの目的は単なる娯楽などではなく、「要するに踊の目的は昔も今も災害除却と云ふ消極的の禱祀に在り」<sup>20)</sup>と説いたものである。それと同時に、踊りというものは元来それを職業とする特定の家筋によって継承されたものであり、それが後に他の村民にも拡大したものと指摘した。ここで「特定の家筋」との表現が見られるが、それは芸能に携わる人々がある種差別の対象であったことを示唆している。柳田は芸能に対する興味を示しながらも、その裏に芸能民たちが長く差別の対象であったことをにわかせている。

もうひとつの『『イタカ』及び『サンカ』』は、前者に比べると差別を

思わせるニュアンスは薄い。この論考における柳田の関心は、イタカやサンカが定住をしない漂泊民であったという、彼らの生活方法にあったといえる。そもそもイタカ（イタコ）は神を降臨させてその神意を宣伝する一種の語部であった。柳田は「移他家」という当て字に注目し、イタカが一定の土地には定住しない漂泊の宗教者であったとした。また、イタカが単身の漂泊者であった一方、柳田は一家族による漂泊生活を行う人々としてサンカに注目した。彼はサンカを窃盗団のように見る当時の風潮に多少影響されながらも、それを「財貨に對する觀念の相異」<sup>21)</sup>に起因するものではないかと推測し、昔のクグツと同系統ではないかと論じる。そしてそのクグツも、女性は娼妓をも兼ねていたことから、巫と娼は表裏一体の関係にあったと推測し、遊女の遊（遊ぶ）を、遊行の遊ぶとみなすことへと論を展開しているのである。

以上のように、この時期の柳田は“非常民”に対して強い関心を抱いていたことがわかるだろう。民俗学の研究を開始した当初、柳田の大きな興味関心のひとつが、同じく“非常民”である山人であったことは知られている。すでに『遠野物語』の時点で山人への眼差しが認められるほか、その数年後の「山人外伝資料」などからも山人への興味の大きさをうかがい知ることができる。柳田は山人を、平地人との闘争に敗れて山中へと逃げ込んだ先住民の子孫ではないかと推測していた。坪井たち東京人類学会の面々が人類の起源を求めようとしたかのように、柳田は日本人の起源を求めようとしたとも考えられよう。

### 第3章 土俗談話会について

本章では、東京人類学会の活動と深く関係し、当時の生活慣習の研究に大きな影響を与えたと思われる土俗会談話会の活動を整理し、紹介していく。

土俗談話会は明治27（1894）年、第94号においてその発足が報知される。鳥居龍藏、小西孝四郎、小林庄藏らが発起人となり、坪井正五郎の賛成を得て開会された。坪井は毎回いわばゲストスピーカーとして参加し、各回の主題も坪井が提示していた。この談話会は明治義会講堂において、人々が各地から参集する人類学会の夏期講習会の機会を利用する形で行われた<sup>22)</sup>。会の主旨は、各地出身者が主題に基づいて、出身地域

の土俗＝風俗・慣習を発表するというもので、情報交換の場として設けられていたものらしい。こうした会合は以前に東大及び予備門の学生による方言に関する研究会が存在した前例はあるものの、土俗関係の会合は史上初めてのものであるという<sup>23)</sup>。会場には日本地図が掲示され、発表者は生国・郡を図上に示し、発表を行った。発言は方言によるものが望ましいとされた。出席者は全国に渡り、アイヌの参加者もみえる。各回において、北から南下、或いは南から北上などと、発表順序を工夫している。風俗・習慣に地域性を読み取ろうとする発想が存在していたと考えられよう。

先行諸研究ではいずれも土俗談話会は第6回まで行われたと指摘しているが、実際は7回開会されている。『人類学雑誌』誌上において、第7回を第6回とするなど誤記がみられ、テーマの異なる第6回が2回存在する事態になっており、先行諸研究はこれを看過したものと思われる。小稿ではふたつ存在する第6回をA・Bと区別し、土俗談話会の会合は7回まで行われたものと判断する<sup>24)</sup>。また、大藤は第6回Bを指して明治33(1900)年8月20日に行われたものとしているが、第6回Bはその報告が明治33年(1900)6月発行に掲載されているため、この会が行われたのは明治32(1899)年8月20日であると判断できる。

明治32(1899)年10月20日発行第163号における坪井による「東京人類学会創立第十五年会演説」の最近一年間の人類学会の活動の総括を参照すると、坪井は本年も例年通り土俗談話会が開催され、近々発起人たる鳥居龍蔵、伊能嘉矩らから報告があろうとのコメントを行っている。半年以上もの遅延はあったが、坪井のいう報告は第6回Bに相当するものであろう。一方、明治33(1900)年11月20日発行第176号における坪井の「東京人類学会創立第十六回記念会演説」によれば、「数年来の慣例で夏期講習会の為出京した人々が相集まって土俗談話会を開く事に成って居たのであります、発起人と成る様な人の居合はさなかつた為本年は其催しがありませんでした」とのことである。明治33(1900)年に土俗談話会がなかったことが知れる。加えて、坪井が「併し丁度此会に代はる様な会が常置されましたから、格別遺憾にも感じません。新設の会は山中笑、奥村繁次郎等諸氏の興にされたもので会名は土俗会と申すのであります」とのことであるが、山中らの土俗会の詳細は不明である。

各回の開催年、参加者数、話合いの主たる題目は以下のようになる。

- ・第1回 明治26年8月24日 9名 「諸地方年始風俗」
- ・第2回 明治27年8月20日 40名 「各地方贈答の風習」
- ・第3回 明治28年8月25日 28名 「各地方の若者が一年中の楽とせるものの種類」
- ・第4回 明治29年8月22日 37名 「育児風習」
- ・第5回 明治30年8月7日 113名 「日本諸地方の食事に関する事実談」
- ・第6回A 明治31年8月9日 ?名（百数十名という）「各地方に行はるる妄信俗伝を問ふ」
- ・第6回B 明治32年8月20日 63名 「各地年中行事其地に特有にして他に向って誇るに足るべきものは何か」

また、明治30（1897）年8月17日、「土俗談話会の追加とも云ふべき」という「土俗茶話会」が上野公園内みはらし亭において行われている<sup>25)</sup>。発起人は本松虎之助、桜井浩、川角寅吉らで、坪井正五郎、鳥居龍蔵らも出席し、憑霊の話から鳥居の台湾調査の成果など、自由な題目で談話が行われている。

このように、明治26（1893）年から明治32（1899）年にかけて、夏期講習会に全国から人が集まる機会を利用して、各地の生活慣習を発表する機会が設けられていた。以下で、土俗談話会をめぐる先行諸研究の評価を検討していく。

関敬吾の土俗談話会への言及は紹介程度の内容にとどまっているが、そこでの報告内容を指して「ほとんどこんにちの民俗学的な問題」を扱っていると評している<sup>26)</sup>。一方、「民俗学の発達と現状」における和歌森太郎の評価は批判的である。和歌森は、「いかにも各地域に『特有』なものを競い求めようとした点に、今日の民俗学と非常な相違がある」とし、一見特殊な事例も「地域的歴史的條件の違い」によって、かつて普遍的だったものが変化したもので、こうした視点を持つことなく、土俗談話会は「ただばくとして人類の普遍を底において特殊」を求めているというのである。このような和歌森の批判の背景には重出立証法への確信がみとれる。一方、大藤時彦は土俗談話会の存在が昭和期の民間伝承の会が主催した民俗学の講習会を想起させるものであるとし、こう

した土俗談話会の営みもふくめて、『人類学雑誌』当時における土俗調査は今日の民俗学のごく初期の研究と考えるとよいと評している<sup>27)</sup>。

この時期すでに民俗学においてもほぼ通用するような分類に基づいて事象を取り上げているという点で、土俗談話会の営みは評価されているが、その実践の在り方については、評価がわかれている。大藤は当時にして中央と地方の研究者の間で情報交換の場が設けられていた点を評価し、昭和期民間伝承の会の講習会の先駆をなす試みだったと考え、和歌森は日本の基層文化を追究する和歌森当時の民俗学の立場から土俗談話会を批判している。確かに、人類学の全人類規模の探求を目的とする姿勢は、民俗学との最も大きな相違の一つである。しかし、出身者が郷里の事象を報告し合う場が整備されたことはやはり評価すべきであろう。そこには情報交換の場として以上に、後の民俗学に連なるような問題意識が看取し得る。進化論的発想によって遅れた文化として扱われながらも、郷土出身者による郷里への眼差しを求めた点において、土俗談話会は民俗学の性格を胚胎している。各地域人が出身地域の生活慣習を報告し合う姿には、同情（共感）や内省を重要なキーワードとする柳田民俗学は勿論、伝承母体としての地域の認識や日常生活の多元性の自覚に至る民俗学的思考の初期のものが垣間見えている。

最後に、第2回土俗談話会報告記事における伊能嘉矩の第102号「科学的土俗研究の必要及び普通教育に於ける関係」について紹介し、伊能の土俗観、土俗学観を検討し、本章を終える。伊能は遠野出身の人類学者で台湾文化の研究やオシラサマの報告で知られ、柳田とも交渉のあった人物である。

まず、伊能は欧州諸国でも「土俗研究」は純粹の科学としてまだ独立していない若い学問であるという現状を確認した上で、日本における「土俗研究」の原則の設定を試みる。まず、「土俗研究に要すべき材料乃ち風俗は、其の地方に於ける現在の観察に取るを要すべき」であるという。「土俗」は解明すべき課題のように用いられ、風俗はその素材たる生活事象であるかのような印象を受ける。即ち、「土俗」とは研究者が各地で現在実際に行われている生活事象全般の中から、なんらかの基準のもとに見出してくるものと解釈できよう。「土俗」が即ち「土着の風俗」と考えて良いならば、研究者は「土着性」を問題として、これのうかがえる「風俗」を研究の対象と考えていたものと思われる。「土着性」は

ここにおいては前近代性を代弁するものであるが、近代のコンテキストによる意味づけを排せば「地域生活に根を張った／地域生活の中で形成された」ものと読み替えることができる。なお、その後の『東京人類学会雑誌』において、この「土俗」という語はあまり用いられなくなっていく。当時の文脈における「土俗」とその後の民俗学における「民俗」との連続性／断絶はなお詳細に吟味する余地を有するが、ここでは『人類学雑誌』当時、地域性を帯びた多様な生活のあり様が文化の進歩の前後関係として解説されつつではあるが、問題化されるようになった点を示唆するにとどめたい。また、「現在行われている」習俗が素材であり、現地に足を運び事象を観測することを重視している点にも注意が必要である。民俗学と同様、フィールドワークを基本方法とするが、当時「残存」が強く意識されている限りにおいて、民俗学の「現在」のみつめ方と、土俗学のそれとの間にも差異を読み取ることができる。柳田民俗学と今日の日本民俗学の間でも、「現在」の見詰め方／「現在」との関わり方は異なる。「現在の問い方」という視点から学問の性質の変遷を辿ることは課題として、別稿を期したい。

さて、伊能が設定した土俗研究に際して則るべき標識を以下に提示しよう。

- ①特関の事実を以て普関の事実となすべからず。変則の事項を以て普通の事項となす可からず。
- ②甲地は乙地に同じく乙地は丙地に同じく而して丙地は甲地に同じき時而かも其の部落が甲乙丙の三地方より成れる場合にあらざれば習俗の契合を認むべからず。
- ③輒すく此れを以て彼れを推し且つ蓋然の断定を用うべからず。
- ④其の習俗の奇異を探るは土俗の研究上寧ろ副次の目的に過ぎざること。
- ⑤故に土俗の研究は帰納的なるを要すこと。

伊能はこうした諸点から土俗学が科学的たるべきことを述べ、土俗／風俗に関心を示しただけの従来の紀行随筆の類とは一線を画すべきことを主張する。対象とした風俗が何ゆえにそのような形で存在せねばならなかったのかという問題に思いを馳せる時、浮上する歴史的な原因は科学的研究を要請するものであるといい、これこそが土俗学の目的とするものであると述べる。上の標識からは、伊能らの目指す科学性の内実が

うかがえる。また、伊能は歴史の問題に言及しているが、あくまでも事象の史の変遷であり、これを担っていた、或いは今現在その事象を担っている庶民の歴史を想定したものではなかったことは指摘できよう。続けて児童の徳育に土俗研究が活用されるべきことも主張している。土俗研究の成果を積極的に役立てていこうとする姿勢には着目しておくべきものがある。

#### 第4章 柳田民俗学と『人類学雑誌』

本章では『人類学雑誌』と柳田國男、或いは柳田民俗学との関係について言及する。先述したように、彼は東京人類学会に入会しており、『人類学雑誌』への投稿も行なっていた。柳田が『人類学雑誌』をどのように評価し、これに対し自らの学問をどのように構想していたかは、『人類学雑誌』を前史として位置付けるに際し、大きな問題の一つとなる。

柳田國男の東京人類学会入会は明治43（1910）年であり、初投稿も同年であるが、入会以前から彼が『人類学雑誌』に興味を持っていたことは疑いない。それは柳田が後年の著作において『人類学雑誌』から度々資料の引用を行なっているからである。『定本柳田國男集』の索引からたどっただけでも、30回近くもの引用をしていることがわかる。

入会后、柳田は「踊の今と昔」、「イタカ」及び「サンカ」を連載したが、その後はしばらく投稿をしていない<sup>28)</sup>。その一方、彼は大正2（1913）年に神話学者の高木敏雄とともに『郷土研究』を創刊し、それ以降の活動の舞台を『郷土研究』にシフトする。大正2（1913）年は、奇しくも坪井正五郎がペテルブルグで客死した年にあたる。

柳田が東京人類学会に関わっていたのは意外と短い期間であったといえる。彼は一時的に『人類学雑誌』に関与したものの、しばらく距離を置くようになるのである<sup>29)</sup>。その原因は研究対象を生活慣習に置くということではなく、目的の違いからであったといえよう。先述したように、坪井たち人類学会による生活慣習研究の主眼は、比較によって人類全体に普遍的に存在する生活慣習を明らかにすることであり、究極の目標は、人類とはなんたるか、であった。しかしながら柳田は、生活慣習の国内間での大きな差異に注目し、「一箇村として他所の町村是を借りて来て間に合せ得るものはありません。故に一郷毎に新たに事情を理解するの

必要があるのです」<sup>30)</sup>と、日本国内における文化の多様性に注目している。これはつまり、生活慣習をその土地ごとに理解するようつとめるべきであり、単純に相対化してはならないという視点であろう。柳田の関心は東京人類学会の人々とは異なり、自国重視の色彩が強かった。柳田にとって、世界の事例と国内の事例を単純に比較しようとする方法は、思想的に異なるものだったのである。

後に彼はいわゆる比較民俗学に対して「世界民俗学」という言葉を使い、民俗学が将来的には世界全体の文化を解き明かす学問となることを願っていた。しかしながらその世界民俗学は「宏大な地域を控へ、各地各種族の千差萬別の生活誌を、細かく分類して標本を作り、それを限なく検定してから、始めて總論が出来ようといふ」ようなものであり、彼はその試みがすぐさま実行に移されるべきものではなく、「自国内で今判つて居るものだけに由つて、ほゞ間違ひがなからうといふ假定だけを立て、みる」<sup>31)</sup>というように、まずは国内のことを固めておくべきであるという意識から郷土研究を志した。はじめから日本の事例を世界全体の風習の一部として位置づける方法は、彼の是とするものではなかつたのである。比較民俗学は「人類自省の究竟地」<sup>32)</sup>であり、一足飛びに目指すのは早計と考えていたことは明らかだ。

以上のような理由もあり、柳田は『人類学雑誌』に代表される、当時の人類学的手法・目的には批判的になっていったことがわかる。『人類学雑誌』を名指ししてはいなくとも、暗にその方法を批判するような発言も多く見られる<sup>33)</sup>。特に、『人類学雑誌』から発した土俗学には、はっきりと厳しい態度をとっていた。彼にとって土俗という言葉には「此語を用ゐる人々の心持には、卑しく鄙びた又奇怪なる所作、自分たちならさうはせぬものといふ意味」が含まれており、人々はこの土俗学から「聴き馴れぬ珍らしい話によつて、一種微笑を伴なふ驚駭の如きものを、味はう」<sup>34)</sup>ことを期待していたと批判した<sup>35)</sup>。

土俗学は自国民の慣習への着目を生んだのだが、柳田は批判的である。彼が土俗学を嫌った最たる理由は、問題意識にあったといえよう。彼にとって土俗学とは、前述したように「一種微笑を伴なふ驚駭の如きもの」を味かうためのものと感じられた。だが、彼の関心の出発点は真に人類学・土俗学的なものではなく、農政官僚として「農村近年の出来事に対して最も深い関心を」抱いていたことにある。柳田の学問は農民史

への関心から出発しており、「何故に農民は貧なりや」<sup>36)</sup>の根本問題の解決が最大の眼目であったことは、常々指摘されてきたことである。そしてその農村問題は決して過去の問題ではなく、「現在」の問題であった。「我々の疑問は國に屬し、又現代に屬する」というように<sup>37)</sup>、彼の学問は現在の日本の抱える問題を解決するためのものだったのである<sup>38)</sup>。

ここに『人類学雑誌』における生活慣習の研究と、柳田の姿勢との間に横たわる相違が明らかになろう。坪井正五郎ら人類学会の人々の最大の研究眼目は「人類本質論・人類現状論・人類由来論」であり、いわば生物全体の中において人類とはどのような存在であり、その起源と発達経路をたどることであった。生活慣習に関する研究もそのような目的に発し、人類社会のあり方を解き明かすものだったのである。そのような人類重視の立場に立てば、生活慣習の全世界的な比較がなされたのは、当時としては自然ななりゆきだったといえる。

しかし、農政官僚から出発した柳田の立場は、生活慣習の研究を国内のそれに絞り込むことにより、眼前に展開する「何故に農民は貧なりや」の問題を解決しようとするものであった。そして、多くの生活慣習を「遺風」というように単純に過去の残存ととらえるのではなく、それを現代の問題として扱おうとしたのである。

加えて、のちに彼は「我々日本人は母語の感覺を以て直接に自分の遠い過去を學び得る幸福を十二分に利用する」と述べ、その問題解決のためには言語のわかる自国民による研究が不可欠であるとした<sup>39)</sup>。いわゆる民俗語彙を重視することにより、「日本人の多數の過去の心」<sup>40)</sup>を探ろうとした柳田の姿勢が貫かれている。このような母語重視の考えは、生活慣習が「國民の學問」<sup>41)</sup>であり、日本人自らが取り組むべき問題であることを表わしている。

こうして柳田は、表面に表れる言葉からその奥に潜む心性に着目し、それを諸問題の解決に供する途を目指したのである。種々雑多な事例を集めるだけの研究ではなく、その事例をまさに学問として「活用」させるための試みだった。それは事例の報告と海外との単純な比較の傾向が強かった『人類学雑誌』と異なり、農村問題の解決という意義を帯びさせることによって、目的の曖昧だった生活慣習の研究に学問としての体裁を整えたといえる。

一方で、そのような柳田にとって日本の民俗学の始祖は意外なことに、

誰であろう坪井正五郎だったのである。「始めて我邦へこの未完成のまゝの新學（民俗学—引用者注）を持つて來たのは、日本人類學の創立者たち、殊に故坪井先生の忘るべからざる功績であった」<sup>42)</sup>というように、民俗学への関心の芽生えを坪井に求めている上、彼を「我々のいふ民俗學の方面の最も有力なる學者」<sup>43)</sup>として位置づけているのである。『人類学雑誌』とそれから発した土俗学に批判的な眼差しを持ち、論考を投稿しながらも東京人類学会とはしばらく距離をとっていたと思われる柳田が、その中心にいた坪井正五郎を民俗学の先人として位置づけていることは意外な事実といえよう。柳田にとって『人類学雑誌』は、後の民俗学者のように単なる批判の対象であったとは言い切れず、『人類学雑誌』から多くの資料を引用しており、情報源としての価値を認めていたことは確かである。また、大正から昭和初期にかけての彼の関心は山人などを通して日本の先住民へと向けられていたが、それは『人類学雑誌』による、人類及び日本人の起源究明の志向と似た類のものであったといえよう。そして何より、日本人の生活慣習が否定的に見られていた明治時代、外国の方法を輸入したものではあったが、そこに学問的な価値を見出した、坪井ら人類学会の人々は、柳田にとってやはり大きな存在であったのではないだろうか。柳田は一時的に彼らの目指した人類学に引き寄せられ、そこで行われている研究方法を批判的に検証し、今度は自らの研究法を編み出そうとしてそこから離れていった。『郷土研究』の創刊は、『人類学雑誌』からの独立宣言であったのかもしれない<sup>44)</sup>。批判するところも大いにありながら、その興味関心の方向性によって多大な影響を与えた『人類学雑誌』は、柳田自身にとって偉大なる先輩であるとともに、反面教師のような存在だったのである。そして、今日の民俗学の立場からも再評価を行う必要があるだろう。

## むすびにかえて

最後に小稿の議論をふまえて、『人類学雑誌』と民俗学との連続性／断絶の質はどのようなものであったのかを整理しておく。

『人類学雑誌』における生活慣習の研究は、慣習を遺跡や遺物と同じように、古いものが完全な形ではないが断片として残存しているものと認識し、対象化した。それは当時の進化論的・進歩史観的発想に基づく

ものであった。そのため、個々の研究は事象や物体のみを見つめ、その背後にある人間生活の全体的具体相への理解や関心は欠如している。風俗や習慣が人々により「伝承」されてきたという意識もまた希薄であり、事象の時間的移動は残存として認識された点、「土俗」という語につきまとう、どこか人ごとのようなニュアンスからも『人類学雑誌』と、後の民俗学との事象の認識のあり方の相違がうかがえる。

しかし、柳田以前から生活慣習を研究することを重視し、資料収集の必要性が訴えられていたことは忘れてはならない。それは、西欧諸国に並ばんとし、近代化を急ぐ風潮の中で、消滅や一大変革にさらされているものとして発見された。そのような変革の中で、失われゆく生活慣習や未知なる世界に眼を向けたのが、坪井らの人類学であり、『人類学雑誌』だったのである。

民俗学が文献史学のアンチテーゼとして組成されたことはしばしば指摘される通りである。また、本居宣長の国学も従来前史として意識されており、中央ではなく地方に前代の「遺風」を見出したのは、「民俗」の発見であり認識であり、間違いなく民俗学の系譜上に位置づけられる。しかし、小稿での議論が明らかにしてきたように、民俗学は当時の人類学を批判的に継承しつつ成立した学問でもあった。その際、『人類学雑誌』の問題意識の内、民俗学が捨象したものは何であったのか、それは研究者の事象の認識のあり方に発する問題であり、小稿が民俗学との断絶として指摘してきた通りである。

先行諸研究における『人類学雑誌』の評価は、その方法論への否定から、実に低いものにとどまっていた。しかしながら、失われようとしている生活慣習に眼を向け、それを研究対象としようとした姿勢は決して無視して済ませられるようなものではない。初期の、そして現在の民俗学が成立する背景には、『人類学雑誌』から切り捨てたものも多かったが、与えられた影響も同様に大きかったのである。生活慣習の科学的研究の芽生えである『人類学雑誌』は、民俗学の前史としてより明確に位置づけられるべきであり、再評価されるべき視点を持っていたものである。また、明治期から始まる資料収集の成果も豊富であり、近世の影響を色濃く残す生活慣習を知るには宝庫といってもよいだろう。研究方法への否定を『人類学雑誌』全体の否定とするのは、まったくの誤りであろう。収集した資料の豊富さとその視点は、現在の我々にとっても間違

いなく有益なものである。

前史を描く作業、ひいては学史を編む作業には、学徒のアイデンティティの問題が付き纏う。民俗学徒は民俗学とはなんであるのかという問いを一生涯放棄してはならない。『人類学雑誌』をめぐる小稿の議論が、2007年現在の民俗学とはどのようにあり、また、どのようにあるべきかという、内省の機会になれば幸いである。

#### 注

- 1) 雑誌名は時期によって『人類学会報告』、『東京人類学会報告』、『東京人類学会雑誌』、『人類学雑誌』とそれぞれ異なるが、小稿では便宜上『人類学雑誌』に統一する。
- 2) 坪井正五郎「本会略史」『人類学会報告』第1巻第1号 1886年 1頁
- 3) 鳥越皓之『柳田民俗学のフィロソフィ』東京大学出版会 2002年 169頁
- 4) 渡辺直経「人類学雑誌100巻の回顧（1）一創刊から坪井会長逝去まで」『人類学雑誌』100ノ2 1992年
- 5) 関敬吾「日本民俗学の歴史」『日本民俗学大系 第2巻 日本民俗学の歴史と課題』平凡社 1958年12月
- 6) 和歌森太郎『日本民俗学講座 第5巻 民俗学の方法』朝倉書店 1976年
- 7) 植松明石「日本民俗学の胎動」（瀬川清子他編『日本民俗学のエッセンス』ペリかん社 1979年）所収
- 8) たとえば新谷尚紀『柳田民俗学の継承と発展』吉川弘文館 2005年など。
- 9) 坂本要「変態と風俗研究 日本民俗学前史」（桜井徳太郎編『日本民俗の伝統と創造』弘文堂 1988年）所収
- 10) 大藤時彦『日本民俗学史話』三一書房 1990年
- 11) 坪井正五郎「人類学的智識の要益々深し」『人類学雑誌』第20巻233号 1905年 468頁
- 12) 坪井正五郎「パリー通信」『東京人類学会雑誌』第5巻第46号 1890年 80頁
- 13) 前掲注5, 6
- 14) 民俗学における「伝承」概念の理論的研究としては、平山和彦の『伝承と慣習の論理』（吉川弘文館 1992年）などの業績がある。
- 15) 山中共古『甲斐の落葉』有峰書店 1975年
- 16) 中山厚「共古先生略伝」（山中共古『甲斐の落葉』有峰書店 1975年）所収 30頁
- 17) 出口米吉「鬼の来る夜」『東京人類学会雑誌』第20巻第228号 1905年 270頁
- 18) 出口米吉「撒豆望粥及散米」『東京人類学会雑誌』第20巻第234号 1905

- 年 505頁
- 19) 『東京人類学会雑誌』第25巻第292号 1910年 399頁
  - 20) 柳田國男「踊の今と昔」『人類学雑誌』第27巻第4号 1911年 205～206頁
  - 21) 柳田國男『『イタカ』及び『サンカ』』『人類学雑誌』第27巻第8号 1911年 467頁
  - 22) 明治義会講堂は当時の麹町区富士見町四丁目に立地していた。
  - 23) 「土俗会談話録（諸地方年始風俗）」『東京人類学会雑誌』第9巻第94号 1894年 144頁
  - 24) 各談話会の報告記事は以下の通り。第9巻第94号（第1回）、第9巻第102号（第2回）、第11巻第115号（第3回）、第12巻第128号（第4回）、第13巻第140号（土俗茶話会）、第13巻第141号（第5回）、第13巻第150号・第14巻大151号（第6回A）、第15巻第171号・第16巻第177号（第6回B）
  - 25) 「土俗談話会と土俗茶話会」『東京人類学会雑誌』第13巻第140号 1898年 75～79頁
  - 26) 関敬吾 前掲論文5 87頁
  - 27) 大藤時彦 前掲論文10 71頁
  - 28) 坪井の死後、大正3年1月の「水の神としての田螺」まで飛ぶ。
  - 29) その後『人類学雑誌』には昭和2年には「蝸牛考」、昭和4年に「葬制の沿革について」を投稿している。後者の冒頭では「近年の日本の人類学が、非常に片寄つた發達をした」と、民間伝承の方面への研究が進まなかったといい、読者に問いかける意味からこの投稿を行なつたと語っている。
  - 30) 後半の「故に～」の一文は『定本柳田國男集』第25巻にはあるものの、菅沼可兒彦名義で『郷土研究』第2巻第7号に掲載した同名論文には見当たらない。
  - 31) 柳田國男『郷土生活の研究法』1935年（『定本柳田國男集 25』所収）325頁
  - 32) 柳田國男「比較民俗学の問題」（草稿）（『定本柳田國男集 30』所収）70頁
  - 33) たとえば『郷土生活の研究法』中の「古い人類学会誌やその他の定期刊行物に、時々地方の篤志家の報告が出てみたのであるが、何れもきれぎれでまたその所在すらも知り難かつた」など。
  - 34) 柳田國男「郷土研究の将来」1931年（『定本柳田國男集 25』所収）471頁
  - 35) 土俗学に対する柳田の批判については、坂本要前掲論文9を参照のこと。
  - 36) 柳田國男『郷土生活の研究法』1935年（『定本柳田國男集 25』所収）326頁
  - 37) 柳田國男「実験の史学」1935年（『定本柳田國男集 25』所収）509頁

- 38) 後藤総一郎「地方学の形成」(『柳田國男論』恒文社 1987年 所収)によると、柳田は農政学に身を置いていたからこそ、近代政府の地方理念や政策に懐疑的であり、地方民衆の生活と精神の歴史を研究対象として明らかにしようとする学問を生み出したと述べた。また、もし農政学の経験がなければ、「すでに歩みをはじめていた坪井正五郎を中心とした「東京人類学会」的フォークロアの世界を歩んでいたかもしれない」と語った。
- 39) 柳田國男「青年と学問」『青年と学問』1928年(『定本柳田國男集 25』所収) 104頁
- 40) 柳田國男「旅行と歴史」1924年『青年と学問』(『定本柳田國男集』 25所収) 133頁
- 41) 柳田國男「Ethnology とは何か」1926年『青年と学問』(『定本柳田國男集』 25所収) 244頁
- 42) 柳田國男「郷土研究の将来」1931年(『定本柳田國男集 25』所収) 471頁
- 43) 前掲注39 243頁
- 44) 『郷土研究』創刊号の巻頭に高木敏雄は「郷土研究の本領」題した一文を掲げている。それによると郷土研究の目的は「日本民族生活の凡ての方面の根本的研究」であるとし、日本の学界(人類学界を指していると思われる)が人種と民族の概念を混同しており、人種問題の解決が日本民族の研究には直結しないと述べている。

### 【主要参考文献】

- 大藤時彦『日本民俗学史話』三一書房 1990年
- 大間知篤三他編『日本民俗学大系 第2巻 日本民俗学の歴史と課題』平凡社 1958年
- 金閔恕・春成秀爾編『佐原真の仕事1 考古学への案内』岩波書店 2005年
- 後藤総一郎『柳田学前史 常民大学紀要1』岩田書院 2000年
- 桜井徳太郎編『日本民俗の伝統と創造』弘文堂 1988年
- 佐野徹『帝国日本と人類学者』勁草書房 2005年
- 瀬川清子他編『日本民俗学のエッセンス』ペリかん社 1979年
- 勅使河原彰『日本考古学の歩み』名著出版 1995年
- 寺田和夫『日本の人類学』思索社 1975年
- 鳥越皓之『柳田民俗学のフィロソフィ』東京大学出版会 2002年
- 福岡良明『辺境に映る日本—ナショナル리티の融解と再構築』柏書房 2003年
- 明治大学考古学博物館『市民の考古学2 考古学者—その人と学問』名著出版 1995年
- 山口昌男『知の自由人たち』NHK ライブラリー 1998年

民俗学関係主要報告一覧

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者																			
『人類学会報告』	明治19年(1886)3月	1	2	我国婚姻に関する諸風習の研究	談話	渡瀬莊三郎																			
	明治19年(1886)4月		3	淡路方言	雑録	岡田信利																			
				婚姻風俗集	雑録	渡瀬莊三郎																			
				土在国方言	雑録	N.Y.																			
	明治19年(1886)5月		4	婚姻風俗集 第二	雑録																				
『東京人類学会報告』	明治19年(1886)6月		5	婚姻風俗集 第三	雑録																				
	明治19年(1886)7月		6	但馬方言	雑録	河本庚之助																			
				伊予大洲方言	雑録	堀佛三郎																			
				光明寺石の樺	雑録	若林勝邦																			
				婚姻風俗集 第四	雑録																				
				穢多の風俗	雑記	箕作元八																			
	明治19年(1886)9月		7	本邦に行はる、当て物の種類及び起源	談話	坪井正五郎																			
				婚姻風俗集 第五	雑録																				
	明治19年(1886)10月		8	荏原郡上目黒村の石樺	雑録	若林勝邦・和田萬吉																			
				石樺の比較研究	雑録	若林勝邦																			
				婚姻風俗集 第六	雑録																				
				方言取調の主意	雑録	三宅米吉・辻敬之・岡村増太郎																			
				安房国方言歌	雑録	岡村増太郎																			
	明治19年(1886)11月	2	9	志摩御坐崎村の習俗	雑録	福地復一																			
				西海道方言表、人倫の部	雑録	岡村増太郎																			
				婚姻風俗集 第七	雑録																				
				高鍋此木大明神は朝鮮人を祭りしものなり	雑録	神田孝平																			
				足利近傍の賤民	雑録	坪井正五郎																			
	明治19年(1886)12月		10	石樺の比較に就きて	談話	若林勝邦																			
				穢多は他国人なる可し	雑録	藤井乾助																			
				婚姻風俗集 第八	雑録																				

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
27				方言歌	雑録	岡村増太郎
28				やし符帳言葉	雑記	岡村増太郎
29				羽前山形辺の嗣と雨具	雑記	若林勝邦
30	明治20年(1887) 1月		11	涅槃の由来	雑録	緒方正清
31				婚姻風俗集 第九	雑録	
32	明治20年(1887) 2月		12	方言歌に付き岡村君に質す	雑録	和田萬吉
33				函館方言	雑録	佐藤重記
34				婚姻風俗集 第十	雑録	
35				ネブタ踊	雑記	井上毅
36	明治20年(1887) 3月		13	णीり掛けの種類及び沿革	談話	坪井正五郎
37				エツクは越人にして元兵の奴隷となりたるものなる事及び其他の事ども	雑録	金子徴
38				婚姻風俗集 第十一	雑録	
39	明治20年(1887) 4月		14	内耳竈の話	談話	神田孝平
40				風俗漸化を計る簡單法	談話	坪井正五郎
41	明治20年(1887) 5月		15	遠江国京小俣丸二村の口碑風俗	雑録	坪井正五郎
42				石棒彙報	雑録	
43				粥杖の起り	雑録	山中笑
44				婚姻風俗集 第十二	雑録	
45				णीり掛け二種	雑録	萩原正倫
46				武蔵四郡にて歳神に奉る物	雑録	根岸武香
47	明治20年(1887) 6月		16	内側に耳ある鍋の事に付き神田孝平先生に申す	談話	坪井正五郎
48				中等以上の者九百人の風俗を調べたる成績	談話	坪井正五郎
49				णीり掛け再考	雑録	坪井正五郎
50				甲斐方言	雑録	吉田時
51				婚姻風俗集 第十三	雑録	
52	明治20年(1887) 7月		17	陸奥中津軽国吉村風俗	雑録	佐藤部
53				णीり掛け考材料	雑録	坪井正五郎

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
54				佐渡方言	雑録	大川通久
『東京人類学会雑誌』	明治20年(1887)8月		18	東京中三ヶ所及び相模三崎にて行いたる風俗測定	雑録	坪井正五郎
56				伊豆御蔵島方言及び盆歌	雑録	栗本俊吉
57				婚姻風俗集 第十四	雑録	
58	明治20年(1887)9月		19	日本鹿製石榊	雑録	淡岸辻夫
59	明治20年(1887)11月	3	21	御幣及び削掛の起り	雑録	山中実
60				阿波の風俗	雑記	鳥居龍藏
61	明治20年(1887)12月		22	削り掛けの事二件	雑録	和田萬吉
62				内耳鍋の事に付きて	雑録	上田栄吉
63				庄内地方の藁人形	雑記	糞虫
64				土藏塗納めの祝	雑記	糞虫
65				信濃盆歌	雑記	菊池松太郎
66				石戦の遺風	雑記	若林勝邦
67				年の始の風俗	雑記	坪井正五郎
68	明治21年(1888)1月		23	伊豆諸島に於ける人類学上の取調、大島の部	談話	坪井正五郎
69				埴輪土偶に基いて古代の風俗を演ぶ	雑録	坪井正五郎
70	明治21年(1888)2月		24	年始風俗彙報十件	雑録	坪井正五郎
71	明治21年(1888)3月		25	羽前国西田川郡五十川村に長寿の者多き事及方言	雑録	羽柴雄輔
72				古船説	雑録	山崎直方
73				年始風俗彙報	雑録	
74	明治21年(1888)4月		26	削掛と御幣	雑録	大矢透
75				婚姻風俗集 第十五	雑録	
76				年始風俗彙報十三件	雑録	
77	明治21年(1888)5月		27	年始風俗彙報	雑録	
78				信濃国諏訪村及び滋野賀村近傍盆風俗	雑記	加茂元喜
79				魂魄を痛来せしめんとする俗	雑記	羽柴雄輔
80	明治21年(1888)6月		28	風俗測定成績及び新案	談話	坪井正五郎
81				風俗測定の研究	雑録	羽柴雄輔

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
	明治21年(1888)7月		29	飛騨国の風俗其他	雑録	藤森峯三
				古代人民の風習の一事を見る	雑録	谷千生
				堅穴に等しき小屋に屬したる漁業	雑録	羽柴雄輔
				婚姻風俗集 第十六	雑録	
	明治21年(1888)9月		31	沖繩県宮古島及沖繩嶋婦沢方言集	雑録	田代安定
	明治21年(1888)10月	4	32	石棒の用法上篇	雑録	羽柴雄輔
				形語(仕方言集)	談話	鈴木券太郎
				日本語方の起源	雑録	寺石正路
	明治21年(1888)11月		33	日本古今文字通考上篇	雑録	金子微
				方言取調を費成すること及莊内方言表	雑録	羽柴雄輔
				長野県河内島方言	雑録	岡澤米吉郎
	明治21年(1888)12月		34	堅穴に等しき小屋に屬したる漁業第二	雑録	羽柴雄輔
				食人風習について述ぶ	雑録	寺石正路
				日本古今文字通考中篇甲	雑録	金子微
				志摩国英虞郡和具村の風俗	雑録	古坂生
	明治22年(1889)1月		35	老岐国風俗及方言	雑録	菊池吉祥
				日本古今文字通考中乙	雑録	金子微
				東京西京及び高松における風俗測定の成績	雑録	坪井正五郎
				遊初島記	雑録	三浦謙之助
				東北地方旅行見聞	雑録	佐藤重紀
				本邦古代法取調項目	雑録	鈴木券太郎
				南部の画曆と与那国の画帳	雑録	坪井正五郎
				方言集	雑録	
	明治22年(1889)2月		36	左衽の風俗	論説及報告	寺石正路
				南部の画曆附年中行事	論説及報告	佐藤重紀
				老岐国風俗後報	論説及報告	菊池吉祥
				息部を画きて神社に納むるの風習	論説及報告	名和靖
				方言研究の材料	論説及報告	坪井正五郎

	雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
110					荘内雜見言葉	論説及報告	羽柴雄輔
111					米沢雜見言葉	論説及報告	佐藤周助
112		明治22年(1889) 3月		37	息部を画きて神社に納むるの風習に関して	論説及報告	鈴木泰太郎
113					日本語と朝鮮語との類似	論説及報告	大矢透
114					因幡国鳥取方言表	論説及報告	加茂元善
115					陸中国鹿角郡方言表	論説及報告	泉沢恒蔵
116		明治22年(1889) 4月		38	東京に於ける髪服履欧化の波動	論説及報告	坪井正五郎
117					居宅の戸口に掲出せる魔除厭勝の類	論説及報告	石井民司
118					今日の日本語	論説及報告	大久保初男
119					小笠原島風俗記	論説及報告	寺石正路
120					日本「ヘブリユ」鬼神談の比較	論説及報告	加茂元善
121					息部を書きて神社に納むるの風習大阪にも有り	論説及報告	長江藤次郎
122					めくら帳	論説及報告	豊田伴
123					方言集(近江、伊豆、岩代、越前、紀伊)	方言集	
124		明治22年(1889) 5月		39	指を以て計算の具とする事	論説及報告	坪井正五郎
125					妄信の材料	論説及報告	石井民司
126					年始風俗彙報	論説及報告	佐藤重紀
127					方言集(越中、下総陸中、志岐)	方言集	
128					めくら帳の一類	雑報	石井民司
129		明治22年(1889) 6月		40	東向き西向き	論説及報告	鈴木泰太郎
130					門戸に掲出す御守りの話	論説及報告	山中笑
131					陸奥国年始風俗彙報	論説及報告	佐藤重紀
132					方言集(上総、加賀、陸中、備後)	方言集	
133		明治22年(1889) 7月		41	日本上古風俗考	論説及報告	白井光太郎
134					大阪に於ける風俗測定及欧化の波動	論説及報告	塚本巳之吉
135					古今文字通考中篇	論説及報告	金子徴
136					陸奥国年始風俗彙報	論説及報告	佐藤重紀
137					方言集(周防、越後、下野、備後、加賀)	方言集	

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
	明治22年(1889) 8月		42	旧化生存の話	論説及報告	鈴木券太郎
				日本古今文字通考中編	論説及報告	金子徴
				ほたき椿説明	論説及報告	真崎勇助
				近江国蒲生郡地方の安信	論説及報告	西川吉之輔
	明治22年(1889) 9月		43	方言集(豊前、駿河、山城、越中) 日本上古風俗図考第二	方言集	
				東京に於ける風俗測定成績	論説及報告	白井光太郎
				安信の材料第二	論説及報告	鳥居邦太郎
				荘内に於て侍たる魔除厭勝の材料	論説及報告	石井民司
	明治22年(1889)10月	5	44	陸奥国北上郡年始風俗 日本古代婚姻法取調材料	論説及報告	羽柴雄輔
				横濱に於ける風俗測定成績	論説及報告	佐藤虎次郎
				樵夫艱夫の禁止語及掟	雑記	三宅米吉
	明治22年(1889)11月		45	二つ山の結婚につきて	雑報	鳥居邦太郎
	明治22年(1889)12月		46	日本古代婚姻法取調材料(続)	論説及報告	藤井秀任
	明治23年(1890) 2月		47	門口に掲出せる魔除厭勝の類 日本古代婚姻法取調材料(続)	論説及報告	片桐文蔵
	明治23年(1890) 4月		49	拍手並手指を以て売買する遺風(付盲目符牒)	論説及報告	三宅米吉
				栲布考	論説及報告	大高坂守衛
	明治23年(1890) 5月		50	荘内に於て婚礼に關する古法令	論説及報告	三宅米吉
				陸奥広前の風俗一斑	論説及報告	井上喜久治
	明治23年(1890) 7月		52	安信の材料	雑報	三宅米吉
				沖繩県八重山列島見聞録	論説及報告	羽柴雄輔
				地名に就きて	雑報	下澤保躬
	明治23年(1890) 8月		53	陸奥の樵夫が用ゆる記号	論説及報告	水田熊彦
	明治23年(1890) 9月		54	めの字の額	論説及報告	淡窪
	明治23年(1890)10月	6	55	薩南諸島の風俗餘事に就て	論説及報告	佐藤重紀
	明治23年(1890)11月		56	薩南諸島の風俗餘事に就て	論説及報告	若林勝邦
					論説及報告	鈴木券太郎
					論説及報告	田代安定
					論説及報告	田代安定

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
	明治23年(1890)12月		57	薩南諸島の風俗餘事に就て	論説及報告	田代安定
	明治24年(1891)1月		58	陸奥広前年中行事一斑	論説及報告	下澤保躬
	明治24年(1891)2月		59	信濃国東筑摩郡松元町之婚姻風習	雑報	田中正太郎
				越中国礪波郡城端町婚姻風習	雑報	田中正太郎
				琉球船の事及び波龍船の事	論説及報告	佐久間舜一郎
				肥後国五家荘人民の生活	論説及報告	石井八万次郎
				陸奥国東津軽郡大野村年末年始の風俗	論説及報告	角田猛彦
				流行病予防のまじないに就て	雑報	鈴木券太郎
	明治24年(1891)3月		60	薩南諸島の風俗餘事に就て	論説及報告	田代安定
				遣風研究の中正月十四日、十五日の風習儀式	論説及報告	鈴木券太郎
				阿波の削り掛	雑報	島居龍蔵
	明治24年(1891)4月		61	沖繩県諸島結繩記標考	論説及報告	田代安定
				越前竹田正月の風俗	雑報	吉野芳
	明治24年(1891)5月		62	沖繩県諸島結繩記標考(続き)	論説及報告	田代安定
	明治24年(1891)6月		63	陸奥国東津軽郡大野村産婦取扱の習慣	雑報	角田猛彦
				阿波国北方の盆小屋	雑報	香川槐三
	明治24年(1891)7月		64	沖繩県諸島結繩記標考(続き)	論説及報告	田代安定
	明治24年(1891)8月		65	沖繩県諸島結繩記標考(続き)	論説及報告	田代安定
				本邦涅槃考	論説及報告	佐藤重紀
	明治24年(1891)9月		66	結繩、書契の例	論説及報告	坪井正五郎
				本邦涅槃考(前号の続)	論説及報告	佐藤重紀
	明治24年(1891)12月	7	69	涅槃の風俗は神代の遺風なり	論説及報告	樋口貞二郎
	明治25年(1892)2月		71	羽前澤新田村の重陽風俗	雑報	黒川友恭
	明治25年(1892)4月		73	大和十津川郷風俗一斑	雑報	山崎直方
	明治25年(1892)5月		74	南部方言	雑報	佐藤重紀
	明治25年(1892)6月		75	南部方言	雑報	佐藤重紀
	明治25年(1892)9月		78	沖繩県諸島記標文字説明	論説及報告	田代安定
	明治25年(1892)10月	8	79	沖繩県諸島記標文字説明	論説及報告	田代安定

194	雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
194		明治25年(1892)11月		80	海南諸高宗教考篇	論説及報告	田代安定
195		明治26年(1893)1月		82	沖縄県諸島記標文字説明	論説及報告	田代安定
196					食人風習補遺	論説及報告	寺石正路
197		明治26年(1893)2月		83	沖縄県記標文字説明(続)	論説及報告	田代安定
198					小児の計算言葉と商家の符牒	論説及報告	羽柴雄輔
199		明治26年(1893)4月		85	飲食物につきて	論説及報告	香川韓三郎
200					沖縄県記標文字説(続)	論説及報告	田代安定
201					鹿児島県下大島郡島雜辭	論説及報告	田代安定
202		明治26年(1893)7月		88	荘内土民の罪人取扱い方に就き	論説及報告	羽柴雄輔
203		明治26年(1893)9月		90	方言の性質及び調査法	論説及報告	岡倉由三郎
204					陸奥弘前地方にて忌む名の種類	雑報	卜澤閑雲
205		明治26年(1893)10月	9	91	方言の性質及び其調査法(承前)	論説及報告	岡倉由三郎
206		明治26年(1893)11月		92	船木の神と「オキクルミ」の話	雑録	ウレンキシマ
207		明治27年(1894)1月		94	土俗会談語録(諸地方年始風俗)	論説及報告	
208					越中旅行見聞録	雑報	
209		明治27年(1894)2月		95	土俗調査より生ずる三利益	論説及報告	田中正太郎
210		明治27年(1894)3月		96	八重山群島住民の言語及宗教	論説及報告	坪井正五郎
211		明治27年(1894)5月		98	奥州地方に於て尊信せらるるオシラ神に就て	論説及報告	田代安定
212					伊豆新島婦人の現況	論説及報告	伊能嘉矩
213		明治27年(1894)8月		101	妄信百五十件	論説及報告	水越正義
214		明治27年(1894)9月		102	第二回土俗会談語録	論説及報告	神田喜三郎
215		明治27年(1894)10月	10	103	妄信録	論説及報告	
216					本邦の丸木舟	雑報	
217		明治27年(1894)11月		104	カジギ及び其名称の分布	論説及報告	川角寅吉
218					再び丸木舟に就て	論説及報告	鳥居龍蔵
219					丸木舟に就て	雑報	鳥居龍蔵
220		明治27年(1894)12月		105	島田藩に似たる古代の結髪	論説及報告	館岡虎三
221		明治28年(1895)1月		106	沖縄県八重山諸島婦人頸飾珠の説	論説及報告	鳥居龍蔵

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
222				安信材料	雑報	和田千吉
223				安信材料集	雑報	田中正太郎
224				安信材料拾遺	雑報	館岡虎三
225				独木舟に就て	雑報	館岡虎三
226	明治28年(1895)2月		107	おしまげ	論説及報告	鳥居龍蔵
227	明治28年(1895)3月		108	播磨国飾東部北篠村に於ける人身御供の遺風	論説及報告	和田千吉
228				羽後国男鹿半島の土俗	雑報	佐藤初太郎
229				大阪桃山の「ノーゼンギヤウ」	雑報	佐藤伝蔵
230	明治28年(1895)4月		109	鳥居氏のカジキ説を讀む	論説及報告	佐藤貞治
231				伊豆新島のヤカミシユ	論説及報告	鳥居龍蔵
232				安信録(第二)	雑録	川角寅吉
233				安信材料第二	雑録	田中正太郎
234	明治28年(1895)5月		110	武蔵秩父地方に於ける人類学的旅行 土俗	論説及報告	大野延太郎
235	明治28年(1895)7月		112	装飾の意匠に就て	論説及報告	下村三四吉
236	明治28年(1895)8月		113	伊豆新島の土俗	論説及報告	坪井正五郎
237	明治28年(1895)10月	11	115	東京人類学会創立第十一年会に於て為したる演説	論説及報告	坪井正五郎
238				甲斐の石椁(図入)	論説及報告	山中笑
239				第三回土俗会談話録(諸地方若者の娯楽)	論説及報告	
240	明治28年(1895)11月		116	伊豆七島の中、利島の土俗	論説及報告	水越正義
241				甲斐の子供遊び	雑録	山中笑
242				宮島の洗骨	雑報	林若吉
243				噺(ケサメ)について	雑報	石井研堂
244	明治29年(1896)1月		118	伊豆大島土俗觀察の記	論説及報告	山崎直方
245	明治29年(1896)2月		119	琉球群島ニ於ケル人類学上の事実	論説及報告	笹森儀助
246	明治29年(1896)3月		120	北陸地方に於ける人類学上の所見・上編	論説及報告	八木契三郎
247	明治29年(1896)6月		123	陸前国黒川郡全部土俗一斑	論説及報告	布施千造
248				羽後国男鹿半島の土俗	雑報	佐藤初太郎
249	明治29年(1896)8月		125	北陸地方に於ける人類学上の所見・中編	論説及報告	八木契三郎

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
250	明治29年(1896)9月		126	越後三面村の土俗	論説及報告	宮高幹之助
251				北陸地方に於ける人類学上の所見(前号の続き)	論説及報告	八木樊三郎
252	明治29年(1896)10月	12	127	東京人類学会創立第十二年会に於ての演説	論説及報告	坪井正五郎
253	明治29年(1896)11月		128	第四回土俗回談話録	論説及報告	
254	明治29年(1896)12月		129	北陸地方に於ける人類学上の所見	論説及報告	八木樊三郎
255	明治30年(1897)1月		130	日本古代の神話と宮古島神話	雑録	鳥居龍蔵
256	明治30年(1897)2月		131	人類学的聞見記	雑録	布施千造
257	明治30年(1897)3月		132	琉球裡診第一篇(沖縄島)	雑録	黒岩恒
258	明治30年(1897)4月		133	阿波国祖谷土俗調査	論説及報告	中井伊與太・曾木嘉五郎
259	明治30年(1897)6月		135	甲斐の贈答風習	雑報	山中実
260	明治30年(1897)7月		136	日本諸地方の食事に關する事實	雑報	
261	明治30年(1897)11月	13	140	東京人類学会創立第十三年会演説	論説及報告	坪井正五郎
262				琉球裡診(八重山)	雑録	黒岩恒
263				子供の遊戯に就て	雑録	田中正太郎
264				土俗談話会と土俗茶話会	雑録	
265	明治30年(1897)12月		141	土俗談話会録(第五回)	論説及報告	
266	明治31年(1898)2月		143	琉球裡診第一篇(沖縄島の続き)	雑録	黒岩恒
267	明治31年(1898)7月		148	各地裡診録(下野、常陸、八丈、信濃)	雑録	磯部武者五郎
268	明治31年(1898)8月		149	石人畧記	論説及報告	八木樊三郎
269	明治31年(1898)9月		150	盲信俗伝	論説及報告	坪井正五郎
270				第六回土俗談話筆記	論説及報告	
271	明治31年(1898)10月	14	151	第六回土俗会速記録	論説及報告	
272				旅中所見(※隠岐の土俗及び石器)	論説及報告	大野延太郎
273	明治31年(1898)11月		152	東京人類学会創立第十四年会演説	論説及報告	坪井正五郎
274	明治32年(1899)1月		154	琉球土俗調査存稿	雑録	黒岩恒
275	明治32年(1899)2月		155	「旭さし云々」の口碑と古墳との關係		
276	明治32年(1899)3月		156	人類学上土俗調査の範圍	論説及報告	坪井正五郎

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
277				琉球土俗調査存稿	雑録	黒岩恒
278	明治32年(1899)6月		159	再び「旭さし云々」の口碑に付て	論説及報告	坪井正五郎
279				美濃の土俗	雑録	林魁一
280				常陸上青柳地方ノ盲信俗伝	雑録	羽生英雄
281				石棒類似の品を祭れる遺風	雑報	武谷等
282	明治32年(1899)8月		161	琉球に於ける盲信俗伝及び児童語	雑録	友寄喜直
283	明治32年(1899)10月	15	163	東京人類学会第十五年会演説	論説及報告	坪井正五郎
284	明治32年(1899)11月		164	伊豆利島の住民	論説及報告	水越正義
285	明治33年(1900)2月		167	大肉食用考	論説及報告	奥村繁次郎
286	明治33年(1900)3月		168	美濃郡上郡古物及土俗	論説及報告	林魁一
287				琉球俚諺 第二篇(宮古)	雑録	黒岩恒
288	明治33年(1900)5月		170	琉球旅行の覚へ書き	論説及報告	吉原重康
289				涅槃風俗	雑報	
290				旭さし云々の一例	雑報	濱田耕作
291	明治33年(1900)6月		171	「旭さし云々」の教例	論説及報告	坪井正五郎
292				第六回土俗会記事	雑録	
293	明治33年(1900)7月		172	伊豆国新島土俗を調査して本邦古代の遺風多き所以を論ず	論説及報告	水越正義
294	明治33年(1900)10月	16	175	沖繩「おがみ」并に「おもろ」双紙に就て	論説及報告	加藤三吾
295	明治33年(1900)11月		176	東京人類学会創立第十六回記念会演説	論説及報告	坪井正五郎
296	明治33年(1900)12月		177	第六回土俗会記事(承前)	雑録	
297	明治34年(1901)1月		178	妄信録(第三)	雑録	川角寅吉
298	明治34年(1901)2月		179	家標考	論説及報告	栗原保二郎
299	明治34年(1901)3月		180	紀伊妄信俗伝	雑録	岡本彌
300	明治34年(1901)4月		181	伊豆初高旅行談	論説及報告	内田鎮蔵
301	明治34年(1901)5月		182	粥杖考	論説及報告	出口米吉
302	明治34年(1901)6月		183	伊豆初高旅行談(承前)	論説及報告	内田鎮蔵
303	明治34年(1901)7月		184	伊豆初高旅行団(承前完結)	論説及報告	内田鎮蔵

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
304					雑報	山田都右衛門
305	明治34年(1901)9月		186	尊崇を受けたる神 土俗比較談	論説及報告	水越正義
306				陸奥国八戸地方に於ける涅槃風俗に就て	論説及報告	河村末吉
307	明治34年(1901)11月	17	188	沖繩考古土俗雑話	論説及報告	加藤三吾
308	明治34年(1901)12月		189	對馬に於ける「旭さす」の伝説	雑報	坪井正五郎
309	明治35年(1902)1月		190	阿波国水頭山土俗	論説及報告	玉置繁雄
310	明治35年(1902)2月		191	東京人類学会創立第十七回記念演説	論説及報告	坪井正五郎
311				涅槃風俗に就て	雑録	高山青嶂
312	明治35年(1902)3月		192	本邦生殖器崇拜畧記	論説及報告	出口米吉
313	明治35年(1902)4月		193	正月十五日の道祖神祭につきて	論説及報告	出口米吉
314	明治35年(1902)5月		194	人柱に関する研究	論説及報告	布施千造
315	明治35年(1902)6月		195	薩南大島の話	論説及報告	昇直隆
316				薩南大島の涅槃風俗	雑録	高山青嶂
317	明治35年(1902)7月		196	美濃国太田町地方涅槃習俗	雑録	林魁一
318				墓碑に利用せる石椋	雑録	中村士徳
319	明治35年(1902)8月		197	拙稿「岐神考」に對する三溪氏の評論につきて	論説及報告	出口米吉
320	明治35年(1902)9月		198	駿河国富士郡及び幡前岡山涅槃風俗	雑録	高山青嶂
321				テントーサマ	雑録	長井行
322				越後国彌彦驛歳末歳首の風俗	雑録	花井菊太郎
323	明治35年(1902)10月	18	199	神籠石に就て	論説及報告	西美波
324				涅槃の起源に就て	雑録	大野雲外
325				甲斐の落葉(一)	雑録	山中笑
326	明治35年(1902)11月		200	甲斐の落葉(二)	雑録	山中笑
327	明治35年(1902)12月		201	琉球雜記	論説及報告	加藤三吾
328				薩南大島に於ける節句儀式及び遊戯	論説及報告	昇直隆
329				日本食物事彙序	雑録	坪井正五郎
330				隱岐国海上郡海土村地方涅槃習俗	雑録	高山青嶂
331	明治36年(1903)2月		203	糖の方言並に迷信に關する材料を求む	雑録	宮島幹之助

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
				大隅国肝屬郡佐多村地方涅槃習俗	雑録	高山青嶂
				甲斐の落葉(三)	雑録	山中笑
	明治36年(1903)3月		204	大隅国肝屬郡花岡村地方涅槃習俗	雑録	高山青嶂
	明治36年(1903)4月		205	日向国宮崎郡青島村地方涅槃習俗	雑録	高山青嶂
	明治36年(1903)5月		206	瘧疾に関する迷信	雑録	窪美昌保
				美濃可兒郡平牧村地方涅槃習俗	雑録	高山青嶂
				甲斐の落葉(四)	雑録	山中笑
	明治36年(1903)7月		208	東京人類学会創立第十八回記念演説	論説及報告	坪井正五郎
				日向国児湯郡木城村地方涅槃習俗	雑録	高山青嶂
	明治36年(1903)8月		209	浦和薬躰草(一)	雑録	出口米吉
				琉球雑記(三)	雑録	加藤三吾
				甲斐の落葉	雑録	山中笑
				長門六島村地方涅槃習俗	雑録	高山青嶂
				瘧について	雑録	米井清三郎
				瘧疾に関する迷信(宮島幹之助君の参考に供す)	雑録	宇都宮勉爾
	明治36年(1903)9月		210	甲斐の落葉(五)	雑録	山中笑
				淡路国津各郡州本町并附近涅槃習俗	雑録	高山青嶂
	明治36年(1903)10月	19	211	東京人類学会創立第十九回記念演説	論説及報告	坪井正五郎
				涅槃風習に就て	雑録	高山青嶂
	明治36年(1903)11月		212	日向国児湯郡美々津村及西臼杵郡岩戸村地方涅槃習俗	雑録	竹内淺助
	明治36年(1903)12月		213	くちよせ	雑録	高山青嶂
				日向国児湯郡水掛町の起源	論説及報告	出口米吉
	明治37年(1904)2月		215	老岐国老岐郡渡良村地方涅槃習俗	雑録	高山青嶂
	明治37年(1904)4月		217	大隅国熊毛郡北種子村地方涅槃習俗	雑録	高山青嶂
	明治37年(1904)5月		218	競争の勝負を以て一年の幸運を獲得せんとする厭勝	雑録	出口米吉
	明治37年(1904)7月		220	對馬国下懸郡嚴原町地方涅槃習俗	雑録	高山青嶂
	明治37年(1904)8月		221	伊豆初島の遺跡及土俗	雑録	玉置繁雄

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
360				美濃国加茂郡東白川村涅槃習俗	雑録	高山青嶂
361	明治37年(1904)9月		222	人類諸問題研究の総括と人類諸問題総話の研究	論説及報告	坪井正五郎
362				對馬上懸郡西津屋村涅槃習俗	雑録	高山青嶂
363				沖繩上流の結婚	雑報	
364	明治37年(1904)11月	20	224	国民伝説史の講義	雑報	鳥居龍蔵
365				方言採集簿	雑報	鳥居龍蔵
366	明治37年(1904)12月		225	琉球群島の單語	論説及報告	伊波普猷
367				甲斐より雷山に至る途上の見聞	雑録	出口米吉
368				大隅国熊毛郡中種子村(野間)涅槃習俗	雑録	高山青嶂
369				沖繩の雨乞ひ	雑報	
370				沖繩の子守歌	雑報	
371	明治38年(1905)1月		226	輪投げにつきて	論説及報告	出口米吉
372				琉球人の誕生日に関する儀式	雑録	内田すゑ
373				大隅国熊毛郡上尾久村(水田)地方涅槃習俗	雑録	高山青嶂
374	明治38年(1905)2月		227	沖繩諸島に住居せし先住人民に就て	論説及報告	鳥居龍蔵
375	明治38年(1905)3月		228	鬼の来る夜	雑録	出口米吉
376				陸中盛岡附近の土俗	雑録	草野甚太郎
377	明治38年(1905)5月		230	琉球人の日常生活	雑録	内田すゑ
378				蘭国の考	雑録	出口米吉
379				美濃に於ける「明日さす云々」の歌	雑報	
380	明治38年(1905)9月		234	撒豆望糶及散米	雑録	出口米吉
381	明治38年(1905)10月	21	235	正月注連繩に炭を飾る習慣	雑録	出口米吉
382	明治38年(1905)11月		236	忌詞につきて	雑録	出口米吉
383	明治38年(1905)12月		237	本邦神話俗伝に見はれたる動物崇拜の一例	論説及報告	小林庄次郎
384	明治39年(1906)1月		238	門松考	論説及報告	出口米吉
385	明治39年(1906)3月		240	強迫的禁厭	論説及報告	出口米吉
386	明治39年(1906)5月		242	蛇崇拜につきて思ひ付けの事ども	雑録	出口米吉
387				北風と南風との婚姻に関する伝説	雑録	S. I.

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
388	明治39年(1906)6月		243	奇怪しき葬礼	雑録	S. I.
389	明治39年(1906)9月		246	伊豆大島の婦人	雑録	篠原とら子
390	明治39年(1906)11月	22	248	陸中に於ける生殖器崇拜の一例	雑報	伊能生
391	明治39年(1906)12月		249	美濃国に於けるオコリに関する妄信俗伝	雑報	林魁一
392	明治40年(1907)1月		250	松に対する邦人古来の思想	雑録	菅野眞澄
393	明治40年(1907)3月		252	薩南海島の俗謡	雑報	
394	明治40年(1907)4月		253	琉球人の仏事に関する儀式	雑録	内田すゑ子
395				越中国五箇山の方言	雑報	米澤生
396	明治40年(1907)9月		258	烏崇拜の遺習	雑録	出口米吉
397	明治40年(1907)11月	23	260	婦人の月経に関する迷信と淫蕩	雑録	米澤足立
398	明治41年(1908)1月		262	元旦の福神	雑録	出口米吉
399	明治41年(1908)2月		263	左義長考	論説及報告	出口米吉
400	明治41年(1908)4月		265	飯杓子に対する俗信の由来	論説及報告	出口米吉
401	明治41年(1908)7月		268	徒然草に見ゆるクサメの風習	雑録	出口米吉
402	明治41年(1908)9月		270	淫蕩に就て	雑録	南方龍楠
403	明治41年(1908)10月	24	271	我国に於ける石崇拜の痕跡	雑録	出口米吉
404	明治41年(1908)11月		272	日本に於ける離婚問題	雑録	坪井正五郎
405				沖繩いろは歌並に其解	雑録	内田すゑ子
406				南波照間物語	雑報	よ、い
407	明治42年(1909)1月		274	小児と魔除	雑録	出口米吉
408				沖繩いろは歌並に其解(承前)	雑録	内田すゑ子
409	明治42年(1909)2月		275	生殖器崇拜	雑録	瀧浦文彌
410				南部の私犬	雑報	よ、い
411				鬼と人	雑報	
412	明治42年(1909)3月		276	沖繩いろは歌正誤及び解釈追加	雑報	
413	明治42年(1909)4月		277	節分の夜門戸に挿す鯛頭につきて	雑録	出口米吉
414	明治42年(1909)9月		282	我国に於ける植物崇拜の痕跡	雑録	出口米吉
415	明治43年(1910)3月	25	288	本邦に於ける動物崇拜	雑録	山中笑

416	雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
416		明治43年(1910)6月		291	本邦に於ける動物崇拜	論説及報告	南方熊楠
417		明治43年(1910)8月		293	陸中国矢崎の腰口祭	雑報	よ、い
418		明治43年(1910)10月	26	295	風俗漸化の測定	雑録	坪井正五郎
419		明治43年(1910)11月		296	本邦に於ける動物崇拜(追加)	雑録	南方熊楠
420				420	馬頭神に就て	雑報	南方熊楠
421		明治44年(1911)1月		298	諸人風習奇談	雑録	坪井正五郎
422		明治44年(1911)2月		299	山神「オコゼ」魚を好むと云ふ事	雑録	南方熊楠
423				423	誕生日に小児の生立を卜ふ事	雑報	南方熊楠
424	「人類学雑誌」	明治44年(1911)4月	27	301	踊の今と昔	論説及報告	柳田國男
425				425	魔除に赤色を用ゐる由来	論説及報告	柳田國男
426				426	山神と「ヲコゼ」	雑録	柳田國男
427		明治44年(1911)5月		302	踊の今と昔(二)	論説及報告	柳田國男
428		明治44年(1911)6月		303	祓に関する一習慣について	論説及報告	出口米吉
429				429	踊の今と昔(三)	論説及報告	柳田國男
430				430	俗間信仰から見た塩	雑録	前田太郎
431				431	首きれ馬の伝説	雑録	笠井新也
432				432	仏経に見えたる古語二則	雑報	南方熊楠
433		明治44年(1911)7月		304	踊の今と昔(続)	論説及報告	柳田國男
434				434	祓に関する一習慣について(完)	論説及報告	出口米吉
435		明治44年(1911)8月		305	唾を祓除に用ゐる習慣につきて	論説及報告	出口米吉
436				436	踊の今と昔(五)	論説及報告	柳田國男
437				437	睡眠中に靈魂抜出づとの迷信	雑報	南方熊楠
438		明治44年(1911)9月		306	イタカ及びびサンカ	論説及報告	柳田國男
439				439	山神猫を忌む	雑報	前田生
440				440	三輪山伝説	雑報	前田生
441		明治44年(1911)10月		307	イスノキに関する里伝	雑報	南方熊楠
442				442	疱瘡の呪	雑報	前田生
443				443	唾を祓除に用ゐる習慣	雑報	よ、い

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
444				信濃木曾の年中行事	雑報	
445	明治44年(1911)11月		308	「イタカ」及び「サンカ」(其二)	論説及報告	柳田國男
446				田麿を神物とする事	雑報	南方熊楠
447	明治44年(1911)12月		309	人身御供	雑報	前田生
448				通魔の俗説	雑報	前田生
449				水掛祝ひの研究の資料	雑報	前田生
450				老岐に於ける百合若の伝説	雑報	
451	明治45年(1912)1月	28	310	白馬節会につきて	論説及報告	出口米吉
452				魔除に赤色を用ゆ	雑報	南方熊楠
453				河童に就て	雑報	南方熊楠
454				古代ヨメの意義	雑報	前田生
455	明治45年(1912)2月		311	「イタカ」及び「サンカ」(其三)	論説及報告	柳田國男
456				降雨の呪術について	雑録	出口米吉
457				神狼の話	雑報	南方熊楠
458				浮世風呂に見えたる関東弁の一例	雑報	前田生
459	明治45年(1912)3月		312	千年以上の火種	雑報	南方熊楠
460				白馬節会に就て	雑報	南方熊楠
461	明治45年(1912)4月		313	狗賓餅と黄泉戸喫	論説及報告	出口米吉
462				遠野雜記	雑録	佐々木繁
463	明治45年(1912)5月		314	いんのこ	論説及報告	石巻良夫
464				豊祭時の水に就て(一)	雑録	前田太郎
465				日本民俗学会の設立	雑報	
466	明治45年(1912)6月		315	御蔵木	雑録	石巻良夫
467				犬の呪	雑報	前田生
468				馬尾鼠巢	雑報	前田生
469				サ、ラと称する特殊部落	雑報	前田生
470				津軽の虫送祭	雑報	武田眞一
471				烏面馬を利用する各方民俗	雑報	

雑誌名	刊行年	巻数	号数	記事名	種別	執筆者
472					雑報	
473	明治45年(1912)7月		316	遠江見附町の觀察 大和国に行はるテングコク(天御時)について	論説及報告	出口米吉
474				喪祭時の水に就て(三)	雑録	前田太郎
475				親が子を殺して身を全うせし事	雑報	南方熊楠
476				近世名古屋に於ける民間信仰の二三	雑報	前田生
477				五月絶織機	雑報	前田生
478				明治初頭に行はれ出した名古屋の手鞠唄	雑報	前田生
479	明治45年(1912)8月		317	睡眠中に靈魂抜出づとの迷信	論説及報告	南方熊楠
480				指切りにつきて	論説及報告	出口米吉
481				喪祭時の水に就て(四)	雑録	前田太郎
482				犬の呪	雑報	出口米吉
483				通魔の俗説	雑報	南方熊楠
484				塩に関する迷信	雑報	南方熊楠
485				血は紅なる鶏の齧合	雑報	
486				振舞水の権子に関する一説	雑報	前田生
487	大正1年(1912)9月		318	ケモノとケダモノにつきて	論説及報告	出口米吉
488				狼人信仰の起源(上)	雑録	前田太郎
489				陸中遠野地方の婚姻	雑報	
490				天柱山上之妖魔	雑報	
491	大正1年(1912)10月		319	岩船	論説及報告	石巻良夫
492				土俗覚帳(一)	雑録	出口生
493				狼人信仰の起源(一)	雑録	前田太郎
494				天明年間京都の方言	雑報	前田生
495				鎌倉時代親族の名称	雑報	前田生
496				融約を守るの説	雑報	前田太郎
497				饑頭云	雑報	前田太郎
498				多産	雑報	前田生
499				広島地方の蟲送り	雑報	前田生